

日本農業工学会
(JAICABE)
—組織と活動—
(創立25周年記念刊行)

日本農業工学会：

農業農村工学会、農業機械学会、日本農業気象学会、日本農作業学会、農業施設学会、農業電化協会、農村計画学会、生態工学会、農業情報学会、日本生物環境工学会

JAICABE : Japan Association of International
Commission of Agricultural and Biosystems Engineering

2009年3月20日発行

目 次

はじめに	真木 太一	1
1. 日本農業工学会の会則		2
2. 日本農業工学会の細則		5
3. 日本農業工学会構成正会員		7
4. 名誉顧問・役員・代議員 (第10期)		8
5. 最近の国内活動について	真木 太一	11
(1) 日本農業工学会総会 (代議員会)		11
(2) 日本農業工学会シンポジウム		12
6. CIGR 国際シンポジウム 2011 の企画・実施計画案		14
CIGR (国際農業工学会) 国際シンポジウム 2011 持続的・生物生産-水、エネルギー、食料-共同主催申請説明書	真木 太一・村瀬 治比古・町田 武美	14
7. CIGR2000 年記念世界大会の回想	橋本 康	20
8. 随想		22
(1) 日本農業工学会の25周年に当って-創成期の思い出とその発展-		
中川 昭一郎		22
(2) 日本農業工学会25周年に寄せて	橋本 康	24
(3) 日本農業工学会とCIGR	木谷 収	26
(4) 混沌と革新にゆれた第9期	中野 政詩	28
9. 日本農業工学会歴代役員一覧		30
10. 日本農業工学会シンポジウム一覧		32
11. 日本農業工学会の顕彰 (フェロー)		38
(1) 日本農業工学会フェロー規程		38
(2) 日本農業工学フェロー選考規則		38
12. 日本農業工学会フェロー・功績賞受賞者等		40
(1) 日本農業工学会フェロー受賞者		40
(2) 日本農業工学会功績賞受賞者		42
(3) 日本農業工学会感謝状受領者		42
13. 国際農業工学会 (CIGR) について	真木 太一・前川 孝昭	43
14. JAICABE - at a glance - (英文)	橋本 康・真木 太一	48
おわりに	真木 太一	52

はじめに

日本農業工学会長 真木 太一（第 10 代会長）

2006 年 5 月に中野政詩前会長の後を受け、第 10 期会長を仰せつかって 3 年、今年の総会で任期満了の予定です。日本学術会議では第 20 期の大改革を経て第 21 期が 2008 年 10 月から始まり、その学術会議会員と日本沙漠学会会長は後 3 年近い任期があります。農学分野では農学・食料科学委員会の内の農学委員会委員長と分科会委員長（3 種）があり多忙です。

さて、本学会は 2004 年に 20 回記念シンポジウムを開催し、また本年はめでたく 25 周年を迎えます。誠に喜ばしい限りです。しかし、本学会は 20 年以上の長きにわたって、農業土木学会（現：農業農村工学会）関係者に事務局長を、また会議室・シンポジウム会場を農業土木会館で使用させていただきましたが、2008 年 5 月 9 日に独立・自立というか、各学会持ち回りになりました。幸いにも橋本元会長、村瀬副会長等のご尽力で日本生物環境工学会が最初 3 年間の事務局（九州大学、実質は大阪府立大学）を引き受けていただきました。今後、それを軌道に乗せるべく、総会・理事会等々、引き続く多くの学会および会員にご協力いただきたいと思っています。

一方、2011 年 9 月に国際農業工学会(CIGR)シンポジウムの東京での開催が、2008 年 9 月のブラジルでの CIGR 総会で決まり、受け皿学会の日本農業工学会は、2008 年 11 月に日本学術会議に予算要求しました。近々その結果が出ますが、国際会議と比較すると国際シンポジウムで予算を受けるのは至難の技です。

2000 年に CIGR 記念世界大会が筑波大学で開催されましたが、中川・田淵・橋本・木谷元会長のご尽力が忍ばれます。その時から CIGR 事務局がドイツから移動する条件が次第に整い、2006 年 1 月～2009 年 12 月に筑波大学の前川孝昭前副会長の元に移り、2006 年 3 月 27 日に当時の CIGR ペリーラ会長や日本学術会議黒川会長等々のご臨席による開所式開催は、密接な国際学会として有意義でした。なお、2010～2013 年の事務局は北海道大学木村俊範先生の元に移動することが、ブラジル総会で決まりましたが、これには CIGR 分科会木谷前委員長等々のご尽力があった結果です。しかし、如何にもスムーズに進んでいるようですが、2006 年末頃に日本学術会議 CIGR 分科会のヒアリングがあり、過去・将来を考慮するとかなり厳しい状況、すなわち CIGR の受け皿学会である本学会の見直しや会費支払等々でも、筋が通った活発な運営・活動をしなければ、継続が難しく予断を許さない状況にあります。懸念案件です。

なお、明るい情報は、2007 年 6 月 21 日付けで日本学術会議協力学術研究団体の指定を受けました。前会長の申し送り事項にありましたが、努力の甲斐あって連合体の学会としては貴重な認定となりました。ただし、農業電化協会は個人研究者の会員制度がないため外れています。

JABEE では学部審査は順調に進み、新たに大学院審査も始まっています。個人的には九州大学で、また 2008 年 10 月には琉球大学でも受けましたが、なんとか認定を期待しています。

2000 年 1 月に橋本元会長の「日本農業工学会—その組織と活動—」発行から 3 期 9 年が経ち、25 周年を記念して、また種々の変革時期に遭遇し、乗り越えの過渡期の最中で、本冊子の発行に漕ぎ着けました。皆様方のご参考になれば幸甚です。

2009 年 2 月 5 日現在、沖縄那覇のカンヒ桜は満開で、近年になく、きれいに咲いています。最後に、今後の日本農業工学会のさらなる発展と継続、ならびに皆様方のご健康を祈念しておきたいと思います。
(琉球大学農学部教授、日本学術会議会員、九州大学名誉教授)

1. 日本農業工学会の会則

平成5年5月24日一部改正

平成20年5月9日一部改正

第1章 総 則

第1条 本会は日本農業工学会と称する。

第2条 本会は事務所を福岡県内に置く。

第2章 目的及び事業

第3条 本会は農業工学に関する会員相互の協力により、農業工学及びその技術の進歩発達に資することを目的とする。

第4条 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。

1. 各学会・協会の連絡・協力及びその総合活動
2. 内外の農業工学関係諸機関・団体及び個人との連絡
3. 講演会等の開催
4. その他目的を達成するために必要な事業

第3章 会 員

第5条 会員を分けて、正会員・維持会員及び国際会員とする。

1. 正会員は、農業工学に関する学術団体とする。
2. 維持会員は、本会の目的に賛助する団体とする。
3. 国際会員は、正会員に属する個人であって、国際農業工学会に登録したものとする。

第6条 本会に入会しようとするものは、別に定める入会申込書を提出し、理事会の承認を得るものとする。

第7条 正会員で退会しようとするものは、その旨書面をもって届け出で理事会の承認を得るものとする。

2. 維持会員・国際会員が2年以上会費を滞納した場合は退会したものとみなす。

第4章 役 員

第8条 本会に次の役員を置く。

会長 1名、副会長 2名、理事 若干名、幹事 2名

会長・副会長は理事とする。

第9条 会長は本会を代表し、会務を統べ、総会及び理事会の議長となる。

第10条 副会長は会長を補佐し、会長に事故があるとき、または欠けたときはあらかじめ会長が指名した順序で、その職務を代行する。

第11条 理事は会長を補佐し、会務を処理する。

- 第 12 条 監事は会計の状況及び理事の業務執行を監査する。
- 第 13 条 役員を選任は総会において行う。
- 第 14 条 役員任期は 3 年とし、更任期の定時総会までとする。ただし、辞任または任期満了の役員は後任者が就任するまではその職務を行うものとする。
- 第 15 条 役員で欠員を生じ、補充の必要があるときは、第 13 条の規定により選任する。後任者の任期は前任者の残存期間とする。

第 5 章 会 議

- 第 16 条 会議を分けて総会・理事会とする。
- 第 17 条 総会は定時総会及び臨時総会の 2 種とする。
- 第 18 条 総会は正会員及び維持会員の推薦による代議員をもって組織する。
2. 代議員の定数及び任期は別に定める。
- 第 19 条 定時総会は毎年 1 回会計年度終了後 2 ヶ月以内に会長が召集する。
- 第 20 条 臨時総会は次の場合にこれを開く。
1. 理事会において必要と認めたとき
 2. 代議員の 5 分の 1 以上から、会議の目的である事項を示して請求されたとき
 3. 監事から請求されたとき
- 第 21 条 総会は会長がこれを招集し、少なくとも 14 日前に会議の目的である事項を書面をもって代議員に通知することを要する。
- 第 22 条 次の事項は総会に提出してその承認を得る。
1. 当該年度の予算
 2. 貸借対象表・財産目録及び収支決算書
 3. その他理事会において必要と認めた事項
- 第 23 条 次の事項は定時総会に報告する。
1. 前年度の事業報告
 2. 会員の状況
 3. 事業及び会計監査の報告
 4. その他理事会において必要と認めた事項
- 第 24 条 総会は代議員総数の 2 分の 1 以上の出席を必要とする。
ただし、欠席者も書面により、または委任により表決権を行使することができる。
この場合出席者とみなす。
- 第 25 条 総会の議決は出席者の過半数をもって、これを決する。
可否同数の場合は議長がこれを定める。
- 第 26 条 理事会は会長が必要と認めたとき招集する。
ただし、会長は理事現在数の 5 分の 1 以上から会議に付議すべき事項を示して理事会の招集を請求された場合には、その請求の日から 14 日以内に、これを召集する。
- 第 27 条 理事会の定足数及び議決については第 24 条及び第 25 条を準用する。

第6章 会 計

- 第28条 本会の事業年度及び会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
- 第29条 本会の事業計画及びこれに伴う収支予算は、会長が編成し、毎年会計年度開始前に、理事会・総会の議決を経て、行使する。
2. 前項の規定にかかわらず、やむを得ない事情により、同項に規定する総会を開催することができないときは、総会を省略することができる。この場合においては、翌会計年度開始後最初に開催される総会において、これに係る承認を得なければならない。
- 第30条 本会の収支決算は、会長が作成し、財産目録・貸借対照表及び収支決算書に監事の意見をつけ、理事会の承認を受けて、定時総会に報告する。
2. 本会の収支決算に剰余金のあるときは、理事会の議決及び総会の承認を受けて、その一部、もしくは全部を基本財産に編入し、または、翌年度に繰越すものとする。
- 第31条 基本財産は財産目録の基本財産の部に記載のうえ、確実な方法により保管し、譲渡・交換または担保に供することはできない。ただし、本会の事業遂行上やむを得ない理由があるときは、理事会及び総会の議決を経て、処分することができる。

第7章 会則の改訂及び解散

- 第32条 この会則の変更は、理事会及び総会において各々の3分の2以上の議決を要する。
- 第33条 本会の解散は、理事会及び総会の4分の3以上の議決を要する。

付 則

1. この会則の施行に必要な細則は、総会の議決で定める。細則には会員の入会・役員選出・理事の職務分担・役員会の規定・代議員の選任定数・会費の額等を規定する。
2. この会則は昭和59年6月30日から施行する。

2. 日本農業工学会の細則

昭和 63 年 5 月 6 日一部改正
平成 4 年 5 月 12 日一部改正
平成 6 年 5 月 13 日一部改正
平成 8 年 5 月 10 日一部改正
平成 11 年 5 月 21 日一部改正
平成 13 年 5 月 18 日一部改正

第 1 章 会 員

- 第 1 条 正会員として入会しようとするものは、所定の入会申込書に次の事項を記入し、または書類を添付して提出する。
1. 団体名
 2. 本部事務所の所在地及び電話番号
 3. 定款及び諸規定
 4. 団体の経歴の概要
 5. 役員の氏名・主要勤務先及び職務
 6. 最近における各種別会員の数
 7. 最近 1 年間の刊行雑誌・図書の表題・発行周期・大きさ・頁数・発行部数
- 第 2 条 維持会員及び国際会員として入会しようとするものは、所定の入会申込書所要欄に記入して提出する。
- 第 3 条 入会者は承認通知を受けて後、会費を納めて資格を得る。
- 第 4 条 会員は、申込書記入事項に変更のあった都度本会に届けなければならない。ただし、正会員にあつては第 1 条第 6 号及び第 7 号は毎年 1 回の届け出とする。

第 2 章 役員・代議員・委員・名誉顧問及びフェロー

- 第 5 条 理事会は役員候補者を選考し、総会に提出する。
- 第 6 条 理事会は正会員ごとに各 1 名の役員候補者の推薦を受け、この中から会長・副会長・理事・監事候補を選出し、総会提出案を作成する。
2. 会長は、前項にかかげる理事以外に、理事候補 2 名以内を推薦し、総会の承認を得て、理事とすることができる。
- 第 7 条 代議員は正会員及び維持会員の推薦によって会長が委嘱し、その任期は 3 年とする。ただし、交替した場合の後任者の任期は残存期間とする。
- 第 8 条 代議員の数は次の基準による。
1. 会員 1000 名以下の正会員にあつては 1 名
 2. 会員 1000 名を超える正会員にあつては次の区分による合計数
 - 1) 会員 1000 名までにつき 1 名
 - 2) 会員 1000 名を超える数につき 2000 名区切り毎に 1 名
 3. 団体のみで構成される正会員にあつては、構成団体数を会員数とみなす。

4. 維持会員にあつては1名
 5. 国際会員にあつては、所属正会員別に30名区切り毎に1名
- 第9条 理事会は次の区分により会務を分担する。
- 庶務・会計・国際・事業
2. 会長は理事のうちから事務局長を指名し、会務の円滑な運営及び理事会から委任された事項の処理に当たらせることができる。
- 第10条 本会は必要に応じ各種の委員会を置くことができる。
- 委員は、理事会の議決を経て会長が委嘱する。
- 第11条 本会に名誉顧問及びフェローをおくことができる。
1. 名誉顧問は理事会の推薦によって会長が委嘱する。名誉顧問は理事会の諮問に応じ、助言することができる。
 2. フェローは理事会の議を経て授与される。フェローは役員ではなく、顕著な功績のあった者を顕彰する称号である。日本農業工学会が返還を求めない限りフェローの称号を保持することができる。

第3章 表彰

- 第12条 本会は事業に貢献した団体・個人を表彰することができる。
- 表彰は理事会の議を経て以下の条項について行う。
1. 本会が主体的に企画・運営した学術的行事における参加学協会等団体
 2. 特に功労のあった個人

第4章 会費

- 第13条 会費は予算に基づき、次のとおり分担せしめる。
1. 正会員
均等割と代議員数割とし、予算作成の際に夫々の額を定める。
 2. 維持会員
年額2万円とする。
 3. 国際会員
国際農業工学会への個人当納入額に事務経費を加算した額とする。

第5章 細則の改訂

- 第14条 この細則の変更は理事会の議決を経て、総会の承認を受ける。

付 則

1. この細則は、総会の議決のあった日から施行する。

3. 日本農業工学会構成正会員

(平成 21 年 1 月現在：9 学会、1 協会) (会員数は 20 年度)

学会名 (正会員期間) (会長、会員数) (備考) (略記) (英文名称、英文略称)

農業農村工学会 (昭和 59 年～現在) (会長：宮崎 毅、会員数：10,478 名)

(平成 19 年 6 月 29 日に農業土木学会より名称変更)

Japanese Society of Irrigation, Drainage and Rural Engineering (JSIDRE) (略記：農工)

農業機械学会 (昭和 59 年～現在) (会長：小池 正之、会員数：1270 名)

Japanese Society of Agricultural Machinery (JASA) (略記：機械)

日本農業気象学会 (昭和 59 年～現在) (会長：蔵田 憲次、会員数：924 名)

Society of Agricultural Meteorology of Japan (SAMJ) (略記：気象)

日本農作業学会 (昭和 59 年～現在) (会長：坂井 直樹、会員数：531 名)

Japanese Society of Farm Work Research (JSFWR) (略記：作業)

農業施設学会 (昭和 59 年～現在) (会長：干場 信司、会員数：522 名)

Society of Agricultural Structures of Japan (SASJ) (略記：施設)

農業電化協会 (昭和 59 年～現在) (会長：木村 滋、会員数：118 団体)

Japanese Association of Agricultural Electrification (JAAE) (略記：電化)

農村計画学会 (平成 2 年～現在) (会長：生源寺 真一、会員数：1261 名)

The Association of Rural Planning (ARP) (略記：計画)

生態工学会 (平成 6 年～現在) (会長：玉浦 裕、会員数 407 名)

(平成 13 年 9 月に CELSS 学会より名称変更)

The Society of Eco-Engineering (SEE) (略記：生態)

農業情報学会 (平成 9 年～現在) (会長：町田 武美、会員数：515 名)

(農業情報利用研究会より名称変更)

Japanese Society of Agricultural Informatics (JSAI) (略記：情報)

日本生物環境工学会 (平成 19 年～現在) (会長：村瀬 治比古、会員数：1224 名)

(平成 19 年 1 月 1 日より日本生物環境調節学会と日本植物工場学会の合併)

Japanese Society of Agricultural, Biological and Environmental Engineers and Scientists (JSABEES) (略記：生工)

総会員数：17,132 名 (+農業電化協会 118 団体)；17,250 名・団体 (各会員数：日本農学会の平成 20 年度資料および生態工学会ホームページ、農業電化協会 18 年度名簿による)

(旧) 日本生物環境調節学会 (昭和 59 年～平成 18 年 12 月)

(平成 19 年 1 月に植物工学会と合併・解散)

Japanese Society of Environment Control in Biology (JSABC) (略記：生環)

(旧) 日本植物工場学会 (平成 6 年～平成 18 年 12 月)

(平成 19 年 1 月に日本生物環境工学会と合併・解散)

Japanese Society of High Technology in Agriculture (SHITA) (略記：植工)

4. 名誉顧問・役員・代議員（第10期）

日本農業工学会名誉顧問・役員

名誉顧問

中川 昭一郎（第Ⅳ期会長）

佐野 文彦（第Ⅴ期会長）

（2000年1月までに任命）

白井 清恒（第Ⅰ期会長）

田 渕 俊雄（第Ⅵ期会長）

橋本 康（第Ⅶ期会長）

（2009年1月理事会承認）

役員

（任期：平成18年5月～21年5月）

（役員の所属・役職は平成20年5月現在）

役職 氏名（勤務先、所属・役職等） 正会員所属学協会

会長：真木 太一（琉球大学農学部・教授、九州大学・名誉教授） 日本農業気象学会

副会長：村瀬治比古（大阪府立大学大学院農学生命科学研究科・教授）
（平成18年5月～18年12月） 日本生物環境調節学会
（平成19年1月～21年5月） 日本生物環境工学会

副会長：駒村 正治（東京農業大学地域環境科学部・学部長、教授） 農業農村工学会

理事：前川 孝昭（筑波大学・名誉教授） 農業施設学会

〃：大政 謙次（東京大学大学院農学生命科学研究科・教授） 生態工学会

〃：橋本 康（東京農業大学・客員教授、愛媛大学・名誉教授）
（平成18年5月～18年12月） 日本生物環境調節学会
（平成19年5月～21年5月） 会長推薦

〃：米川 智司（東京大学大学院農学生命科学研究科附属農場・准教授）
日本農作業学会

〃：笹尾 彰（東京農工大学・副学長、理事） 農業機械学会

〃：町田 武美（放送大学・教授、茨城大学・名誉教授） 農業情報学会

〃：岩崎 和己（農業農村工学会・専務理事）
（平成18年5月～20年5月） 会長推薦

〃：野口 伸（北海道大学大学院農学研究院・教授）
（平成20年5月～21年5月） 会長推薦

監事：花形 将司（東京電力(株)法人営業部営業第一グループ）
（平成18年5月～20年5月） 農業電化協会

〃：松岡 修（東京電力(株)法人営業部・グループマネージャー）
（平成20年5月～21年5月） 農業電化協会

〃：千賀裕一郎（東京農工大学大学院共生科学技術研究院・教授） 農村計画学会

代議員（正会員推薦）

(任期：平成16年1月1日～18年12月31日)

(所属・役職は平成18年12月現在)

大橋 敬子 (東京大学大学院農学生命科学研究科・講師)	日本生物環境調節学会
富士原和宏 (東京大学大学院農学生命科学研究科・助教授)	日本生物環境調節学会
佐瀬 勘紀 ((独)農業工学研究所・研究チーム長)	日本農業気象学会
長野 敏英 (東京農業大学地域環境科学部・教授)	日本農業気象学会
梅田 幹雄 (京都大学大学院農学研究科・教授)	農業機械学会
後藤 隆志 ((独)生研センター基礎技術研究部・部長)	農業機械学会
志賀 徹 (宇都宮大学農学部・教授)	農業施設学会
田島 淳 (東京農業大学地域環境科学部・講師)	日本農作業学会
今田新一郎 ((社)農業電化協会・事務局長)	農業電化協会
元杉 昭男 ((社)地域資源循環技術センター・専務理事)	農業土木学会(農業農村工学会)
中曽根英雄 (茨城大学農学部・教授)	農業土木学会(農業農村工学会)
河野 英一 (日本大学生物資源学部・教授)	農業土木学会(農業農村工学会)
池田 文雄 ((株)ジルコ・代表取締役)	農業土木学会(農業農村工学会)
中島 克己 ((社)土地改良建設協会・専務理事)	農業土木学会(農業農村工学会)
西井 武夫 ((社)農業土木学会調査研究部・部長)	農業土木学会(農業農村工学会)
石田 憲治 ((独)農村工学研究所・研究チーム長)	農村計画学会
高辻 正基 (東海大学開発工学部・教授)	日本植物工学会
大下 誠一 (東京大学大学院農学生命科学研究科・教授)	日本植物工学会
齋藤 高弘 (宇都宮大学農学部・助教授)	生態工学会
星 岳彦 (東海大学開発工学部・教授)	農業情報学会

代議員（国際会員）

(任期：平成16年1月1日～18年12月31日)

(所属・役職は平成18年12月現在)

高垣美智子 (千葉大学園芸学部・講師)	日本生物環境調節学会
羽生 広道 (元(財)電力中央研究所応用生物部)	日本農業気象学会
小池 正之 (筑波大学農林工学系・教授)	農業機械学会
長坂 善禎 ((独)農業・生物系特定産業技術研究機構・主任研究員)	農業機械学会
佐竹 隆顕 (筑波大学農林工学系・教授)	農業施設学会
森泉 昭治 (茨城大学農学部・教授)	日本農作業学会
寺添 斉 ((財)電力中央研究所応用生物部・主任研究員)	農業電化協会
佐藤 寛 (農業土木技術者継続教育機構・機構長)	農業土木学会(農業農村工学会)
渡邊 文雄 (東京農業大学地域環境科学部・助教授)	農業土木学会(農業農村工学会)
佐藤 洋平 ((独)農業環境技術研究所・理事長)	農村計画学会
林 真紀夫 (東海大学開発工学部・教授)	日本植物工場学会
遠藤 良輔 (日本大学大学院総合科学研究科・助手)	生態工学会
町田 武美 (茨城大学農学部・教授)	農業情報学会

代議員（正会員推薦）

（任期：平成19年1月1日～21年12月31日）

（所属・役職は平成19年5月現在、および新任は任命時のもの）

佐瀬 勘紀（(独)農業工学研究所・研究チーム長）	日本農業気象学会
長野 敏英（東京農業大学地域環境科学部・教授）	日本農業気象学会
梅田 幹雄（京都大学大学院農学研究科・教授）	農業機械学会
後藤 隆志（(独)生研センター基礎技術研究部・部長）	農業機械学会
志賀 徹（宇都宮大学農学部・教授）	農業施設学会
田島 淳（東京農業大学地域環境科学部・講師）	日本農作業学会
今田新一郎（(社)農業電化協会・事務局長）	農業電化協会
元杉 昭男（(社)地域資源循環技術センター・専務理事）	農業土木学会（農業農村工学会）
仲宗根英雄（茨城大学農学部・教授）	農業土木学会（農業農村工学会）
河野 英一（日本大学生物資源学部・教授）	農業土木学会（農業農村工学会）
池田 文雄（(株)ジルコ・代表取締役）	農業土木学会（農業農村工学会）
中島 克己（(社)土地改良建設協会・専務理事）	農業土木学会（農業農村工学会）
西井 武夫（(社)農業土木学会調査研究部・部長）	農業土木学会（農業農村工学会）
石田 憲治（(独)農村工学研究所・研究チーム長）	農村計画学会
高辻 正基（東海大学開発工学部・教授）	日本生物環境工学会
大下 誠一（東京大学大学院農学生命科学研究科・教授）	日本生物環境工学会
齋藤 高弘（宇都宮大学農学部・准教授）	生態工学会
星 岳彦（東海大学開発工学部・教授）	農業情報学会

代議員（国際会員）

（任期：平成19年1月1日～21年12月31日）

（所属・役職は平成19年5月現在、および新任は任命時のもの）

羽生 広道（元(財)電力中央研究所応用生物部）	日本農業気象学会
小池 正之（筑波大学農林工学系・教授）	農業機械学会
長坂 善禎（(独)農業・生物系特定産業技術研究機構・主任研究員）	農業機械学会
佐竹 隆顕（筑波大学農林工学系・教授）	農業施設学会
森泉 昭治（茨城大学農学部・教授）	日本農作業学会
寺添 齊（(財)電力中央研究所応用生物部・主任研究員）	農業電化協会
佐藤 寛（農業土木技術者継続教育機構・機構長）	農業土木学会（農業農村工学会）
渡邊 文雄（東京農業大学地域環境科学部・助教授）	農業土木学会（農業農村工学会）
佐藤 洋平（(独)農業環境技術研究所・理事長）	農村計画学会
野口 伸（北海道大学院農学研究院・教授）	日本生物環境工学会
遠藤 良輔（日本大学大学院総合科学研究科・助手）	生態工学会
町田 武美（茨城大学農学部・教授）	農業情報学会

5. 最近の国内活動について

日本農業工学会長 真木 太一

(1) 日本農業工学会総会（代議員会）：2008年5月9日午前中開催

日本農業工学会総会（代議員会）挨拶

東京では5月はずっとも過ごしやすい季節ですが、本日はこのような天気・曇り空です。私の住んでいる沖縄は、すでに真夏になったかと思われる日があり、蒸し暑い日で驚きます。最も、5月1日に北海道で30℃を越えた地点が11箇所のアメダス観測点、また3日には九州でありました。異常気象の始まりでしょうか、驚いています。

さて、本日は総会（代議員会）、シンポジウム、フェロー表彰式、懇親会と、忙しい日程になっています。理事会の後は、総会（代議員会）ですが、1年間の事業・活動報告、会計予算関係等の審議であります。よろしくご検討のほどお願い致します。

私の任期は中間を過ぎたところではありますが、日本農業工学会は、長年、農業土木学会（現：農業農村学会）にお世話になってきました。一昨年、2006年から、自立をせねばならない状況があり、昨年、2007年からは本格的に事務局の移転先を検討し、依頼し、捜してきましたが、なかなか受けていただける学会がなく、苦慮していました。幸い日本生物環境調節学会と植物工学会が合併した日本生物環境工学会が引き受けていただける事になりました。それぞれの学会の関係者に心より御礼申し上げます。もちろん、この代議員会、総会でお認めいただかなくてはなりません、農業土木会館から出て行く先は他にはないとの事をご理解いただきたいと思います。逆に言えば、協力学会があった事で、日本農業工学会が継続できる足場が固まったものと、ある程度安心しています。しかし、会計的には、じり貧になるころであります。何か事業を行って収入を増やすか、会費値上げなどをしなければならない状況にあります。

本学会は昭和59年6月30日に制定されてから、今年で24年になります。やっと、ローテーションとして、2番目の学会に事務局が移ったと理解したいと思います。なお、来年、2009年は25年です。25周年記念でも行いたい状況であります。

さて、今年のこの日まで、かなりの苦労がありました。何とか乗り切りたいところです。

もう一つは、昨年、2007年6月21日付けで日本学術会議より協力研究団体に指定されました。このことは非常に喜ばしい事ですが、農業電化協会には、学術会議関係からははずれていただかなければならず、自主的にはずれていた経緯がありました。一般的な個人会員を擁する学会ではなく、学術会議の規程にはマッチしなかったためです。しかし、日本農業工学会としては、問題なく、いっしょに活動が行えると言うことです。よろしくお願い致します。

さて、この日本学術会議協力研究団体に連合体の日本農業工学会が認定された事は、学会個別よりも連合体としての関係が重要であります。簡単に言えば、個別の学会とはある程度の距離を置いて協力するが、連合体の学会とはより密接に協力し合うとの意向があるように感じられます。逆にそのような学会の設立を望んでいます。これは、日本学術会議が国の特別な機関として生き残るには、個別の学会推薦による学術会議会員ではなく、cooptation制度、すなわち、旧会員が新会員を自分達で選ぶ制度を実施するようになったためです。20期

からそのようになっています。今年、2008年10月からは21期が始まります。現在会員の選考はほぼ終わり、現在、連携会員の選考に入っています。このようなことから連合体の学会は重要であります。農学関係では日本農学会との2学会です。貴重な存在となっています。理工学では我々の関連するところでは地球惑星科学連合（大連合）がありますが、そのようなことで、一層重要性を増すものと思っています。

ところで、2008年8月31日～9月4日にはブラジル・イグアスで日本農業工学会と密接な関係がありますCIGR（国際農業工学会）が開催されます。種々の行事があり、私も参加します。興味のある方に、ご案内いたします。ご参加ください。

ところで、シンポジウムは24回目です。「農業工学分野における地理空間情報の利用」で農業情報学会と生態工学会が主として貢献しています。4名の講演者と総合討論を予定しています。皆様方のご参加を期待しています。

最後に、事業開催には日本農業農村工学会には大変お世話になっています。農業土木会館の使用等、ご協力に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

（2）日本農業工学会シンポジウム：2008年5月9日午後開催

第24回「農業工学分野における地理空間情報の利用」

主 催：日本農業工学会（10学協会）

日 時：平成20(2008)年5月9日13:30～16:40

場 所：農業土木会館6階大会議室（担当：生態工学会・農業情報学会）

開催趣旨：近年の地理情報システム（GIS）やリモートセンシングなどの地理空間情報の利用にはめざましいものがある。昨年5月には、GISと衛星測位を一体的に推進することを目的とした地理空間情報活動推進基本法が成立し、農業工学の分野においても、災害に強く魅力ある農業・農村づくりや攻めの農業へ転換、水利ストックの有効活用・施設管理、精密農業、生態系・環境管理などへの利用が期待されている。本シンポジウムでは、この分野で活躍している先生方に話題提供を頂き、農業工学分野の地理空間情報利用の状況と今後のあり方について考える。

会長挨拶：真木 太一（日本農業工学会長、琉球大学農学部）

非常に過ごしやすい季節となっています。私は日本農業工学会の会長を仰せつかって、2年になります。本年も無事、総会（代議員会）が終了し、ほっとしているところであります。また、このシンポジウムの後に、フェロー表彰、懇親会・祝賀会の行事があります。

（総会・代議員会の挨拶で述べたことと多く重なるので、ここでは相当部分、割愛します。）

さて、ここに多くの参加者を得て、シンポジウムが開催されようとしています。

日本農業工学会は昭和59年に設立されて以来、24年目を迎えています。

従って、日本農業工学会のシンポジウムは24回目です。「農業工学分野における地理空間情報の利用」で農業情報学会と生態工学会が主として寄与されています。もちろん、10学協会主催です。本日は4名の講演者と総合討論を予定しています。この後、コーディネーターの大政先生より、趣旨説明があります。皆様方の活発なご討論を期待しています。

なお、来年は事務局を福岡市、九州大学に移し、実際の事務は大阪府立大学で実施されます。そして、シンポジウム等、年次の会は東京で開催したいと思っています。今後ともご協力のほど願います。

最後に、これまで長年に亘り、日本農業工学会のシンポジウムを開催させていただいたことに対しまして、日本農業農村工学会岩崎専務理事初め関係者の方々に心より感謝申し上げます。また、各学会関係者に対しましても、御礼申し上げます。ありがとうございました。それでは、大政先生よろしく申し上げます。

1. リモートセンシングを基軸とした農地空間の情報化とその利用

野口 伸（北海道大学大学院農学研究院）

情報技術を活用した生産技術－精密農業、リモートセンシングによる農地空間の情報化、省エネルギー・環境保全型の農業生産技術としてのリモートセンシング、産業用無人ヘリコプターによる低空リモートセンシング、衛星リモートセンシングによる省エネルギー・環境保全型農業の実践、フィールド環境の非線形時変系モデリングと最適制御

2. 空間情報を活用した低コスト草地整備法

梅津 裕（北海道大学大学院農学研究院）

はじめに、草地整備、トラクターを用いた低コスト測量システム、2次元レーザ距離計を用いた高能率測量システム、空間フィルタリングによる工事計画設計、土壌改良材の可変散布、おわりに、（キーワード：改良山成工、GPS、IMU）

3. GISを活用した不定広域流出モデルによるため池群の洪水軽減効果の評価

吉迫 宏（（独）農業・食料産業技術総合研究機構農村工学研究所）

はじめに、GISデータの標準化と整備、GISを活用した不定流広域流出モデルの作成、棕梨川流域における不定流広域流出モデルの作成、棕梨川流域の概要、シミュレータを構成するソフトウェア群、流域情報GISデータベースの作成、GISデータ間の連携処理、水理計算用データの作成、不定流広域流出モデル、シミュレーション結果の検証、棕梨川流域のため池群が持つ洪水軽減効果、ため池群の初期水位と流量軽減効果の関係、棕梨川流域におけるため池群の洪水軽減効果、おわりに

4. 湿原・河川敷における生物多様性保全のための空間情報解析

清水 庸（東京大学大学院農学生命科学研究科）

はじめに、生物多様性にかかわる空間情報、航空機ハイパースペクトル画像による植物種の空間分布推定、鬼怒川河川敷におけるシナダレスズメガヤの空間分布推定、渡良瀬遊水池における絶滅危惧植物種の潜在的空間分布の推定、高茎草本植物のシュート密度マップ、絶滅危惧植物種の潜在的空間分布の推定、おわりに

総合討論：コーディネーター

大政謙次（東京大学大学院農学生命科学研究科）・町田武美（茨城大学農学部）

閉会挨拶 駒村 正治（日本農業工学会副会長、東京農業大学）

参考資料

講演要旨集：日本農業工学会、2008：日本農業工学会第24回シンポジウム－農業工学分野における地理空間情報の利用－、平成20年5月9日、農業土木会館6階大会議室、pp. 34.

6. CIGR 国際シンポジウム 2011 の企画・実施計画案

CIGR (国際農業工学会) 国際シンポジウム 2011 持続的生物生産－水、エネルギー、食料－ 共同主催申請説明書

説明者：真木 太一 (代表)・村瀬 治比古・町田 武美

- 1 会議名：CIGR (国際農業工学会) 国際シンポジウム 2011 持続的生物生産
－水、エネルギー、食料－
CIGR International Symposium 2011 on Sustainable Bioproduction
－ Water, Energy, and Food

- 2 主催：日本農業工学会、日本学術会議 (希望)

日本農業工学会(JAICAE: Japan Association of International Committee of Agricultural and Biosystems Engineering)

(参加 9 学会：日本農業気象学会、日本農作業学会、日本生物環境工学会、農業情報学会、農業機械学会、農業農村工学会、農業施設学会、農村計画学会、生態工学会)

後援 (予定) 文部科学省、農林水産省、国土交通省、環境省、経済産業省、東京都

協賛 (予定) 園芸学会、日本作物学会、農業システム学会、日本林学会、日本農芸化学会、日本土壌肥料学会、日本熱帯農業学会、土木学会、日本建築学会、日本気象学会、日本沙漠学会、その他

- 3 母体団体：国際農業工学会 (CIGR, Commission Internationale du Genie Rural / The International Commission of Agricultural and Biosystems Engineering)

- 4 開催時期：平成 23 年 9 月 19 日 (月) ～23 日 (金) [5 日間]

2011 年,月日	午前の部	午後の部	夜の部
9 月 19 日(月)	—————	レジストレーション	ウェルカムパーティー
9 月 20 日(火)	開会式・特別講演(市民公開)	特別セッション	各種会議
9 月 21 日(水)	エクスカージョン*	エクスカージョン*	—————
9 月 22 日(木)	一般講演(口頭・ポスター)	一般講演(口頭・ポスター)	各種会議
9 月 23 日(金)	一般講演(口頭・ポスター)	一般講演・閉会式	フェアウェルパーティー

*) : エクスカージョン (会期中 3 日目) : 筑波学園都市試験研究機関・筑波大学等

- 5 開催場所：タワーホール船堀 (〒134-0091 東京都江戸川区船堀 4-1-1 / TEL: 03-5676-2211)

- 6 参加予定者数：34 ヲ国 / 1 地域・400 人 (国外 150 人、国内 250 人)

[その他同伴者：国外 25 名、国内 25 名] (合計：450 名)

アルゼンチン、オーストラリア、ブラジル、カナダ、中国、デンマーク、エジプト、フランス、

ドイツ、インド、インドネシア、イングランド、イスラエル、イタリア、日本、韓国、マレーシア、メキシコ、モンゴル、ニュージーランド、オランダ、ノルウェー、フィリピン、ポルトガル、ロシア、サウジアラビア、シンガポール、スペイン、スウェーデン、スイス、台湾、タイ、トルコ、ベトナム、アメリカ合衆国 以上、34 カ国／1 地域

7 開催状況：2年ごと [過去開催状況]

開催年（回）	開催地	参加 国数	参加 者数	日本人 参加者数	備考
1930（第1回）	ベルギー(リエージュ)	8	50	0	コンGRESS
2000（第14回）	日本（つくば）	39	406	225	記念コンGRESS* 総理大臣メッセージ
2001	米国(サクラメント)				シンポジウム
2003	米国(ラスベガス)				シンポジウム
2005	ロシア(セイントピ ータースバーグ)				シンポジウム
2007	英国(グラスゴー)				シンポジウム
2009	ドイツ(ポツダム)				シンポジウム
2011	日本（東京）	34 カ国 /1 地域	400	250	シンポジウム

*) 2000年記念大会以降、コンGRESSとコンファレンスに2区分して2年毎に開催している。また、その間で2年毎に国際シンポジウムを開催している。

8 会議の意義・目的：我が国および世界の農業工学の発展に寄与し、持続的・生物生産のための農業生産環境に焦点を当てることによって、人類に不可欠な安全・安心で高品質な食料の増産、水・エネルギーに関する農業生産環境保全等によって、農林水畜産業の発展を促進すること。

9 会議開催の経緯と概要：本国際シンポジウムは、国際農業工学会（CIGR, Commission Internationale du Genie Rural / The International Commission of Agricultural and Biosystems Engineering）

が実施する国際シンポジウムであり、21世紀の農業工学をシステムと情報に関わるハイテクノロジーと開発途上国を含めた世界農業との調和を探索しつつ、展望することを目的とするものである。

(1) 国際農業工学会は、食料生産に関わる工学技術の発展・普及を目途とする世界規模の国際学会であり、平成7年度より日本学術会議が加入している。1930年に創立大会をベルギーのリエージュで開催して以降、大会をスペインのマドリッド、イタリアのローマと継続させ、最近では4年毎に世界大会（World Congress）を各国で開催している。特例として、2000年に記念世界大会を日本のつくばで開催した（The XIV Memorial CIGR World Congress 2000）が、定例では、2002年にアメリカ合衆国で、2006年にドイツのボンで開催しており、2010年にはカナダのケベック、2014年に中国で開催予定である。一方、国際会議（International Conference）は2004年に中国・北京で開催し、また2008年8月31日～9月4日にブラジルのイグアスフォールズで

開催している。そして、2012年にはスペインのヴァレンシアで開催予定である。

平成7(1995)年に日本学術会議が、CIGRに加入して以来、我が国の農業工学に対する各国の感心が急速に高まり、前述のようにCIGRが2000年に創立70周年の輝かしい節目を迎えるに当たり、特に世界的に食料不足が懸念される21世紀の農業を農業工学方面から展望し、技術課題を検討する絶好の機会とする考えから、CIGRの特別な記念世界大会(第14回世界大会の通し番号付与)が筑波大学で開催された。これは先端的な我が国の農業工学の研究開発の現状や関連する事業所・製造工場等から新たな問題点を発掘し、21世紀の農業工学に関する科学技術を展望し、先進国である我が国がアジアの発展途上国の農業の問題点を工学技術面から総括し、農業工学的見地から欧米の先進国との架け橋になるよう国際会議としての位置付けも配慮して開催された大会であった。

上述の大会開催に引き続くことで、世界大会と国際会議は、しばらく開催できない状況を考慮して、上述の開催理念を引き継いで、この際、2年ごとに開催される大会・会議の間に各国で開催されているCIGR国際シンポジウムを開催することが、時期的・地域的にも、また人的にも最適とされ、第21期の最終年月である平成23(2011)年9月に開催することが有意義であると判断され、開催計画を立てた。

2000年記念大会の開催によって、世界の中での我が国の農業工学の研究レベルの高さを自他共に認められた形となり、その実績が評価された。また、2006年1月よりCIGR事務局がドイツから移動して、2006～2009年に筑波大学の前川名誉教授(事務局長)の下で引き受けられている。また、2010～2013年からは北海道大学の木村教授の下で、さらに4年間の事務局が維持されることが決まり、そのサポートの意味も大きい。

しかし、世界大会や国際会議は頻繁には開催されなく、当分は日本で開催できないことを考慮して、主として大会と会議間において開催が可能な国際シンポジウムが有効であろうと判断された。

さて、本国際シンポジウムの開催に当たっては、第20期の早い段階(2006年)からCIGR分科会で論議され、最適の開催方法を検討し、CIGR本部に開催を打診し、正式の開催の申請を2008年4月11日に提出してきたところであるが、2008年9月3日に至って、ブラジルでの第37回世界大会総会において、2011年の国際シンポジウムの開催が正式に決定された。

なお、本国際シンポジウムの開催に当たっては、日本農業工学会が受け皿学会となり、数年前から開催計画を企画して検討し、かねてより事前に申請準備を進めてきたところである。そして、2008年10月4日に開催された日本農業工学会理事会で論議して開催申請を確認するとともに、CIGR国際シンポジウム2011組織委員会委員および同実行委員会委員を選定した。

2008年10月23日に第1回CIGR国際シンポジウム組織委員会において委員長、副委員長、幹事(2名)を決定するとともに、開催内容の検討と申請書作成の実質的な作業を実施し、申請書を提出することとなった。なお、今後は可及的速やかに、募金・プログラム等の各種委員会を発足させ、具体的活動を行う予定である。

(2) 農業工学は、農業生産に関する土地基盤、機械化、農作業、環境改善等の工学的技術を研究する学問分野であり、CIGRの分類に従うと、主要な研究テーマは、「土と水」、「建築物と環境改善」、「作業機械」、「電力とエネルギー」、「生産管理と労働科学」、「農産物処理」、「情報システム」の7技術分野に分類される。それらの分野別分科会によって活発に活動している。

(3) 今回のシンポジウムでは「持続的生物生産－水、エネルギー、食料」をメインテーマに、

21 世紀の最先端の農業工学のさらなる発展・普及を目的に開催されるが、その他に特別セッションを軸に、上記 7 技術分野との相互関連で検討が行われることとなっている。その成果は、石油高騰とともに、オーストラリアの連続早魃・干害による農作物減収、バイオエタノールの大掛かりな製造、加熱した投資等々に起因する食料高騰の重大な時代において、地球環境問題としての地球温暖化と異常気象とも関連して、世界的な食料危機が懸念される中で、その問題解決策の一端が得られるものと期待されている。

農業工学は上記 7 分野において、日本の研究水準を高め、世界における研究発展に対して多大な貢献をしており、今後の 7 部分野の研究・教育・行政のさらなる発展が大きく期待されている。

(4) 2000 年の記念大会および今回の国際シンポジウムによって、世界の研究・技術・教育者が一堂に会して 21 世紀の農業工学に関して討議を行い、世界の研究・技術・教育者が交流することは、我が国におけるこの方面の優れた研究状況、新しい手法の開発状況などを多方面に国際的に認識してもらう絶好の機会でもありと考えられる。我が国が工業生産技術と同様に食料生産技術においても国際的に大きく貢献できる状況を理解してもらうことは、我が国のこの方面の科学技術の研究・開発を一段と飛躍的に発展させる契機となるものと確信する。

この国際シンポジウムを日本で開催することは、我が国で推進中の IT、農業用ロボット、精密農業、生物環境調節、気象環境制御、遺伝子組み換え作物隔離栽培施設等々のイノベーション技術を全世界の研究者に大きくアピールし、多くの研究者の参画を促す絶好の機会となるとともに、我が国のこの分野の科学者に世界の多くの科学者と直接交流する機会を与えることとなり、我が国の農業工学に関する研究を一層発展させる契機となる。また、本国際シンポジウムを開催することにより、日本人科学者のもたらした成果について、社会に還元し、科学に関する一般社会の興味を大いに高めることが期待される。

10 会議構成：

(1) プログラム・セッション：開会式、シンポジウムの招待講演・特別講演（市民公開講座）、特別セッション、一般講演（口頭発表セッション、ポスター発表セッション）、各種委員会、学術・企業展示、エキスカージョン

(2) テーマ・主要題目：

○メインテーマ：「持続的生物生産－水、エネルギー、食料」

○主要題目：持続的生物生産のための農業生産環境の評価・解明・利用、人類に不可欠な安全・安心で高品質な食料生産の増強、水・エネルギーに関する農業生産環境保全。8 セッションとして、構造物と環境、バイオシステム工学、食料・食育の中の技術、情報技術、エネルギー、土壌と水、電力と機械、その他の課題

○招待講演・特別講演：①水問題と農業生産、②エネルギー問題と農業生産、③食料生産と農業環境

○特別セッション：①地球温暖化と異常気象・農業気象災害、②太陽光植物工場（グリーンハウス）、③農業システムの情報化・自動化（農業用ロボット）

○一般講演セッション（口頭発表、ポスター発表）：①土と水、②施設と環境、③作業機械、④エネルギー（電力、風力、太陽光、バイオマス）、⑤作業管理、⑥ポストハーベスト、⑦水田農業、⑧畑地農業、⑨乾燥地農業、⑩食料生産、⑪ロボット、⑫リモートセンシング、⑬リスクと安全・安心、⑭その他の農業工学・農業技術関係

○講演（口頭発表）：150 題、ポスター発表：200 題

(3)会議使用言語：英語（同時通訳：あり／開会式、特別講演、一般公開セッションのみ）

(4)会議プロシーディングス：1 件 4 頁として約 1400 頁（CD）を刊行し、参加者に無料配布する。

(5)展示内容：

学術展示：（実施予定） 学術写真パネル、ポスター等の展示

企業展示：（実施予定） 気象測器、環境調節施設、農業機械等の展示

(6)予算：

【収入】

1 会議参加登録費 15,000,000 円（一般早期） 40,000 円×180 名=7,200,000（一般後期） 50,000 円× 60 名=3,000,000（学生・開発途上国早期） 25,000 円×100 名=2,500,000（学生・開発途上国後期） 30,000 円× 60 名=1,800,000（同伴者） 10,000 円× 50 名=500,000

2 展示・広告収入 50,000 円× 10 件= 500,000

3 寄付金 5,500,000（一般） 2,500,000（財団） 3,000,000

4 国費（希望） 7,900,000 合計 28,900,000 円

【支出】

1 会議準備費 8,300,000 円 (1)人件費 1,900,000 (2)旅費 1,500,000 (3)庁費 4,900,000

2 会議運営費 17,100,000 円 (1)人件費 1,800,000 (2)旅費 2,200,000 (3)庁費 13,100,000

3 会議後処理費 2,500,000 4 募金経費費 500,000 5 予備費 500,000
合計 28,900,000 円

11 会議における特筆すべき事項：CIGR（国際農業工学会）は、農業工学分野において最も歴史のある国際学会である。2000 年の日本での開催は、2000 年記念大会として、アジア地域で初めて開催された。なお、2000 年記念大会以降、コンGRESSとコンファレンスに 2 区分して 2 年毎に開催している。また、その間で 2 年毎に国際シンポジウムを開催している。日本においては、2000 年大会の後を引き継いでの 2011 年の国際シンポジウムの開催である。

農業工学分野の最近では文化勲章を受賞した沢田敏男京都大学名誉教授（元総長）がいる。また、紫綬褒章受章者が日本農業工学会に所属する 10 学協会の中の日本農業気象学会 1 学会だけでも 5 名いる。これら紫綬褒章受章者のほとんどが出席予定である。

世界における最先端の研究である IT、農業用ロボット、生物環境制御、施設園芸、気象環境制御、農業機械、農業土木、農業情報処理等々で我が国はトップレベルを誇っており、特に苗生産システム、バイオ環境調節、植物工場、室内外の気象環境調節・制御等々での研究成果は大きな注目を集めている。

12 会議主催者代表・連絡先：

(1) 主催学会（申請学会）：

日本農業工学会会長：真木 太一 [琉球大学農学部・教授、九州大学・名誉教授]

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原 1 番地

TEL : 098-895-8784 / FAX : 098-895-8784 / Mail : maki1944@agr.u-ryukyuu.ac.jp

事務担当者 : 村瀬 治比古 [大阪府立大学院農学生命科学研究科・教授]

〒599-8581 大阪府堺市中区学園町 1-1

TEL : 0722-54-9429 / FAX : 0722-54-9918 / Mail : hmurase@bics.envi.osakafu-u.ac.jp

(2) 設置委員会 : 名称 : CIGR 国際シンポジウム 2011 組織委員会

委員会の設置 (発足) 年月日 : 平成 20 年 10 月 23 日

主催 (申請) 学術団体との関係 : 日本農業工学会の下に設置される内部委員会

代表者 : 委員長 : 真木 太一 [琉球大学農学部・教授、九州大学・名誉教授]

副委員長 : 村瀬 治比古 [大阪府立大学院農学生命科学研究科・教授]

幹事 : 野口 伸 [北海道大学大学院農学研究院・教授]

幹事 : 前川 孝昭 [筑波大学・名誉教授]

委員 : 梅田 幹雄 [京都大学大学院農学研究科・教授]

委員 : 木村 俊範 [北海道大学大学院農学研究院・教授]

委員 : 町田 武美 [愛国学園大学・教授、茨城大学・名誉教授]

(3) 連絡代表責任者 : CIGR 国際シンポジウム 2011 組織委員会 : 真木 太一

13 その他 : 募金団体 : CIGR 国際シンポジウム 2011 国内委員会募金委員会

委員長 : 町田 武美 [愛国学園大学・教授、茨城大学・名誉教授]

委員 : 大下 誠一 [東京大学大学院生命科学研究科・教授]

委員 : 大政 謙次 [東京大学大学院生命科学研究科・教授]

委員 : 駒村 正治 [東京農業大学地球環境科学部・教授]

委員 : 長野 敏英 [宇都宮大学農学部・特任教授]

委員 : 橋口 公一 [第一工業大学・教授、九州大学・名誉教授]

委員 : 早川 誠而 [山口大学・名誉教授]

参考 : CIGR 国際シンポジウム 2011 実行委員会

委員長 : 真木 太一 [琉球大学農学部・教授、九州大学・名誉教授]

副委員長 : 村瀬 治比古 [大阪府立大学院農学生命科学研究科・教授]

副委員長 : 駒村 正治 [東京農業大学地球環境科学部・教授]

副委員長 : 前川 孝昭 [筑波大学・名誉教授]

幹事 : 野口 伸 [北海道大学大学院農学研究院・教授]

委員 : 大政 謙次 [東京大学大学院生命科学研究科・教授]

委員 : 千賀 裕太郎 [東京農工大学共生科学技術研究院・教授]

委員 : 笹尾 彰 [東京農工大学・副学長]

委員 : 橋本 康 [愛媛大学・名誉教授]

委員 : 町田 武美 [愛国学園大学・教授、茨城大学・名誉教授]

委員 : 米川 智司 [東京大学大学院生命科学研究科・准教授]

7. CIGR2000年記念世界大会の回想

橋本 康（同実行委員長）

1：はじめに

上記国際会議について書くよう真木日本農業工学会長から依頼を受けた。会議の3年前に日本農業工学会長を引き受け、準備に費やしたのは10余年前のことであり、多少の記憶違いも少なくないが、古い資料を探し出し、如何にして国際会議を立ち上げて行ったか、また、その時期に俯瞰的視点で何を目指したか、さらに農業工学の多くの先生方が委員として如何に尽力されたか等を記したい。今後の参考と成れば、望外の喜びである。

2：企画の立ち上げの流れ

1996年9月に開催のCIGR第44回総会においてCIGR2000年記念世界大会の日本開催が正式に決定した。その決定を受け、1997年5月に開催の日本農業工学会第13回総会（年次大会）において上記世界大会の受け入れが決定し、同時に小生は田淵会長から会長を引き継いだ。つづいて、同年6月に開催の日本農業工学会第64回理事会においてCIGR2000年記念世界大会の運営委員会及び同実行委員会の設置を決定し、同年8月～10月にかけて上記実行委員会を3回開催し、日本農業工学会理事会でその企画を了承すると同時に、同年11月に日本学術会議第17期に於いて新たに設置されたCIGR専門委員会「現分科会」（委員長：橋本）が実行委員会の支援に回り、CIGR2000年記念世界大会の基本的な構成案が決定した。同年12月にCIGR2000年記念世界大会運営委員会の第1回総会を開催し、上記基本案を承認し、日本学術会議共催の申請を行った。翌春の審査会で申請のプレゼンテーションを農業工学会長・CIGR専門委員長の橋本が行った。

3：日本学術会議共催の決定を受けて規定に基づき組織を再編成

1998年2月に日本学術会議共催が内定した。同年3月、日本学術会議へ概算要求資料を提出し、1999年6月、日本学術会議共催が閣議で最終決定した。この間、上記実行委員会を5回、運営委員会を1回開催し、準備を更に推進した。農業工学会役員を中心とする上記運営委員会と、学術会議会員や研連委員（現連携会員）を主とする学術会議側の国際会議委員会とが並列し準備を進める形が必要とされた。

1999年10月、日本学術会議と日本農業工学会との間でCIGR2000年記念世界大会の開催に関する合意書の締結に基づき、第1回のCIGR2000年記念世界大会組織委員会が発足した。運営委員会から組織委員会への移行に伴い、若干の変更を余儀なくされたが、最終的には以下に記載の組織体制で本会議を成功に導くことが出来た。

3-1 組織委員会委員（50音順）

木谷 収（組織委員長）、橋本 康（実行委員長：学術会議会員）、相賀一郎、大下誠一、大政謙次、岡本嗣男、蔵田憲次、古在豊樹、後藤英司、佐竹隆頭、佐藤洋平、塩 光輝、白石英彦、瀬尾康久（学術会議会員）、世良田和寛、高倉 直、高辻正基、田中忠次、田淵俊雄、

富田正彦（学術会議会員）、相木千尋、中野政詩（学術会議会員）、長島守正、長堀金造、中村良太、仁科弘重、林 真紀夫、前川孝昭、真木太一、宮崎 毅、安富六郎、山崎耕宇（日本学術会議国際会議等検討委員）、松田藤四郎（日本学術会議国際会議等検討委員）、山崎 稔、和田完司（日本農業工学会事務局）（35名）

3-2 組織委員会幹事会

日本農業工学会内で実質的な計画・実施を担当した運営委員会及び実行委員会は組織委員会幹事会と名称を変更し、名目的に組織委員長を委員長とした。

組織委員会幹事会役員名簿（50音順）

木谷 収（委員長）、橋本 康（副委員長：実行委員長）、大政謙次、岡本嗣男、古在豊樹、佐竹隆頭、佐藤洋平、白石英彦（岩崎和巳）、瀬尾康久、田淵俊雄、中村良太、仁科弘重、林 真紀夫、前川孝昭、真木太一、宮崎 毅、和田完司（日本農業工学会事務局）（17名）

4：会議の日程、参加者、経費等

- （1）日程：2000年11月29日～12月1日 筑波大学会館
- （2）参加者：外国人181人（同伴者17人）、日本人225人（同伴者7名）、計430名
- （3）参加費（事前）：一般4万円、途上国3万円、学生・60歳以上3.5万円、同伴1万円
当日参加料は上記各参加費に5千円を上乗せ
- （4）経費の概算 決算額：2900万円 予算額：2500万円 差額は各学会分担金を返還
但し、学術会議からの国費は別会計。予算として一括交付されず、使用に当たって、
規定に適合するか審査があり、逐次許可を得た。
- （5）農業工学会参加の学協会へ支援を要請する分担金（田淵試案）は、総額937万円。
（4）で記載の約400万円の残額は、出費額に案分し、返還した。
- （6）学術会議の強い指導で、収支計算書は、公認会計士の監査を受けた。

5：会議の方向性とCIGR-VII部会（農業情報利用）の立ち上げ

永いCIGRの歴史において、2000年記念大会で何を目玉とするか、論議を呼んだ。世界の食料事情（面分布特性）、時代の要請（経時的特性）をエルゴート理論ではないが、根底に据え、加えるに我が国の特徴（水田と稲作、背景の工業技術の高度な水準）を加味し、「生産のシステム化と情報利用による21世紀の農業工学—ハイテクノロジーの導入による、変貌する地球環境下における食料増産—」をメインテーマとし、CIGRの従来からの6部にわたる技術部会との相互関連において、農業工学のブレイクスルーを目指すこととした。

結果として、此の会議の総会で、技術部会「農業情報利用」が新たに設置されることになり、会議のメインテーマがCIGRに新たな第VII部会設置に貢献することになった。

6：おわりに

農業工学の技術者が少なからず参加しているIFAC（国際自動制御連盟）は、システム制御や関連する数理情報技術を専門とし、本メインテーマに深く関わるが、IFACで活躍のプレナリー講師や次期会長等多くの西欧関係者の強い支援を受けた。当時の村瀬TC（農業応用）委員長の尽力を記し、現TC委員長の野口会員にCIGRとIFACの連携を期待したい。

8. 随 想

日本農業工学会の25周年に当って —創成期の思い出とその後の発展—

中川 昭一郎（本会第4代会長・名誉顧問）
東京農業大学客員教授

今年で日本農業工学会が25周年を迎えるとのこと。最近の当学会活動の活性化・充実化は、その創成期を知る者の一人として今昔の感に耐えないところである。この機会に日本農業工学会（日本学術会議）の国際農業工学会（C I G R）への正式加盟にまつわる思い出などを中心に記し、今後の学会を担われる若い方々への参考に供したいと考え、敢えて筆を取った次第である。もう20年近くも前のことでもあり、記憶の間違ひも多々あるかと思われるがお許し願いたい。

私が日本農業工学会やC I G Rに深く係わり始めたのは、1988年に農業土木学会の専務理事として当学会の理事（事務局長）を仰せつかってからである。当時はそれまで名ばかりであった日本農業工学会が休眠状態から再建されて約4年がたち、学会もやっと組織としての形が整い始め、個人的色彩は強かったもののC I G Rとの交流も始まったばかりの頃であった。一方、私は1985年より日本学術会議（第13期）の会員となっており、農学（当時の第6部）全般の学術国際交流に関与する機会も多く、国際学術組織の実態や日本学術会議の国際交流における役割なども知るようになっていた。

そんな状況の中で、私は図らずも日本農業工学会の会長（1988～1990）を努めることになったが、その頃の学会は予算に乏しく会員学会（当時7学協会）の会費と農業土木学会の好意にのみ依存する状態で、年1回のシンポジウムを開くのが精一杯の状況にあり、C I G Rの諸会議に毎年代表を送るなど思いもよらぬ状態であった。したがって、学術会議の少ない枠の代表派遣旅費を当てにするか、役員個人的海外出張をC I G Rの会議にうまくぶつけてもらうなど、多くの努力を重ねたが、それもほぼ限界に達しようとしていた。

その後、私は引き続き日本学術会議の会員に選出され、第14期（1988～1991）には第6部副部長に推挙され、自分の専門分野や農学部門だけに留まらず、国際交流を含む学術全般の運営に係わるようになり、日本農業工学会やC I G Rについても、学術全般の中での客観的位置付けが理解出来るようになった。そして、努力次第では、日本農業工学会が日本学術会議を通じてC I G Rに正式に加盟できるかも知れないと考え、その頃の学会事務局長であった木谷収氏を中心に、正式加盟の申請に必要な資料の作成などに努めて戴いた。

そして、学会長に佐野文彦氏が就任され、私が学術会議（第15期）の第6部長になった1992年に、両者の関係によって学術会議にC I G R加盟の申請を行い、学術会議としての正式議題として取り上げてもらえることとなった。しかし、学術会議の審査は大変厳密であり、その後も追加資料の作成やC I G R側の理解も必要となるなど、今にして思えば、木谷氏を中心とする関係者の努力は大変なものであった。また一方、日本農業工学会では佐野会長の

英断によって 1993 年にアジアではじめての C I G R の総会が東京で開催され、来日された Pellizzi 会長に学術会議の近藤次郎会長へ表敬訪問して戴くなど、C I G R 加盟への環境づくりをタイミングよく進めることができた。

その結果、第 15 期の終わりに近い 1994 年 2 月に、国際問題を扱う常置委員会の厳しい審査の結果、「日本学術会議が加盟する要件の全てを満たし、日本学術会議が分担金を負担することが適当である」との結論が会長あてに上申され、国費負担による C I G R への加盟は次年度の予算計上後の総会での最終決定を待つのみとなった。

このような状態で、学術会議は第 16 期 (1994~1997) に入り、第 6 部長も私から志村博康氏 (故人) に引き継がれたが、その翌年春の総会 (1995 年 4 月) において、志村氏の理を尽くした説明もあり、学術会議として分担金を伴う C I G R への正式加盟が最終決定し、ここに 6 年余にわたる農業工学関係者の一致した努力が漸く実を結ぶことになった。そしてまた、厳しい予算情勢のもとで、ここ 4 年間も国際学会への新規加盟が途絶えていた当時の学術会議に対しても、新たな展望を開くものとなったのである。

約 10 年前に出版された「日本学術会議五十年史」によれば、1995 年時点で、日本の学術団体などが対応している国際学術団体 440 以上あるとされているが、そのうち 2000 年時点で、日本学術会議が加盟している国際学術団体は全学問分野で 48 分野に過ぎず、そのうち第 6 部 (農学) が主として関係する国際団体としては C I G R が唯一のものとなっている (残念ながら現在の状況は把握していないが)。このようなことから見ると、農業工学分野のこの加盟実現が、如何に貴重なものであったかを実感することができる。

1995 年のこの加盟以降、日本農業工学会と日本学術会議および C I G R との関係は、木谷収氏のアジア人として初の C I G R 会長への就任や各部会での日本研究者による貴重な役割の分担など、以前とは比較にならない程密接なものとなり、とくに 2000 年には C I G R 記念大会を世界から多くの参加者を集めて日本の筑波で開催し成功するなど、世界における日本農業工学会の地位は飛躍的に向上したといえよう。

私が役職を退いた 2000 年以降の諸活動については、余りフォローできていないが、聞くところによれば、さらにその後は、世界各地で順次開催されている大会や各種研究活動には、若い研究者を含め多くの日本研究者を参加し、主導的研究発表がなされており、とくに最近では C I G R 事務局という重責までを日本で引き受けているとのこと、創成期を知る者の一人として、大変嬉しく思うと同時に、日本学術会議の大幅な体制変更に伴い種々ご苦労されている現役役員の方々に心からの声援を送りたいと思う。

今、世界を覆っている地球温暖化・食料の不足高騰・エネルギーの不足転換・自然環境の保全・各種技術のイノベーション、などの新たな重要課題に対応するためには、農業工学分野の科学技術の発展は不可欠であり、新たな発想に立った研究展開が強く求められている。そしてそのためには上述してきたような日本農業工学会をめぐる創成期の困難とはまた質の違った多くの困難が待ち受けているであろう。創立 25 周年に当り日本農業工学会のますますの発展を祈るや切である。

日本農業工学会 25 周年に寄せて

橋本 康（本会第 7 代会長）

1：はじめに

私が栄えある日本農業工学科会に関わりを得たのは、故杉二郎先生が創設された日本生物環境調節学会（現日本生物環境工学会）から推薦され第 3 期の理事に就任した昭和 63 年（1988 年）でした。理事を続けて 3 期、そして第 6 期副会長、第 7 期会長、及び CIGR-2000 年記念筑波大会のジェネラル・チェアを務め、その後引退しました。

しかし、日本学術会議(日学と略記)が第 20 期（2005 年）に大改革を遂げ、日本農業工学会が激動の渦に巻き込まれると予想され、当時の首脳を含む有志の話し合いで、例外的に第 10 期の理事として、再度ワン・ポイントのご奉公に到った次第です。ちなみに、日学では、第 13 期(1985 年)から第 17 期まで研連委員、第 18,19 期は会員として、大改革の直前まで連続 20 年の間関与し、特に改革直前の第 19 期においては当時の組織制度常置委員会に第 6 部（農学）代表の委員として、日学の組織や制度設計に深く関わっておりました。斯くして意図せずに更に深く農業工学会に関与し、25 周年記念を迎えることになりました。

2：CIGR との関わり

CIGR との接点は、湾岸戦争の直後、1991 年 3 月に、中川昭一郎先生（当時本会長）からのご下命により、パリで開催の CIGR 総会に出席したのが最初でした。そこで、ベルギーの役員と親しくなり、それが契機で 1993 年に学振から 3 ヶ月間のベルギー（KU ルーバン大学）への短期訪問が実現しました。ベルギー滞在中に当時 CIGR 事務局長であった D 氏と親しくなり、CIGR に引き込まれることになったようです。

当時、私は制御工学の国際学会 IFAC（日学承認では 20 年程先輩）の TC（農業工学系システム制御技術委員会）のチェアをしており、ベルギーを拠点に、西欧の関係委員と頻繁に TC 活動に従事してました。アントワープ郊外の D 氏（ベルギー農業工学研究所長）宅に金曜になると何回か呼ばれ、週末を奥様の自慢の料理をサカナに国際学会や、西欧文化（特に教会堂とフランス料理学？）の話題に花が咲きました。数理科学に立脚する IFAC は全てに細かく、学会の運営細則等も CIGR より数段先を行っていたのでしょう。何気ない話に、相槌を打ちながら時としてメモを取る姿に、国際学会の事務局長は違うなと感じてました。

翌 1984 年の CIGR ミラノ大会で、突然第 2 技術理事会の会長に指名され、驚きました。国際学会では、よく見られる年功を飛ばした人物本位の荒っぽい人事です。意味深な笑いを浮かべる D 氏とは、以後 4 年間世界各地で開催された CIGR 役員会で顔を合わせ、フランス料理等の続編が続きました。IFAC が超多忙になり、モロッコで開催された次の世界大会で、4 年間の CIGR の重役をおりました。前川・現 CIGR 事務局長とカサブランカを旅したことは、楽しい思い出であり、優秀な後続の出現に豪華な海鮮料理で乾杯しました。

3：CIGR2000 年記念世界大会

1997 年に大先輩の田淵東大教授から日本農業工学会会長を託されました。国際学会通の私が 2000 年に開催が予定されていた国際大会に役立つとの天命であると認識しました。農業

工学分野では、IFAC 等工学先端分野に比べ国際化がやや遅れており、1995年に日本農業工学会が日学に承認されたのを記念しての日本学術会議主催による記念大会でありました。

田淵前会長の策定された農業工学参加 11 学協会からの資金援助に基づき、学術会議援助のヒアリング等々、殺人的な仕事に追いまくられましたが、成功裡に終わり、各学会へは援助金の約半額弱を戻しました。日学への国際会議開催申請書を作成する過程で、本会が基礎科学分野に比べ学術的なステイタスが低いことに気付き、慌ててフェローを創設いたしました。予算も無いので、バッヂのデザインはパソコンで自家作成し、安価に仕上げました。当初反対意見もありましたが、現在では農業工学会のサステイナブル・サポータの増加に貢献しているようです。その大会の報告は別途触れますが、大活躍された真木先生や前川先生が以後の本会関連の立役者になっておられることは、目出度い限りといえるでしょう。

4：新体制とその意義

2005年10月、日学は本当に大改革を実行しました。農学関係の30名の会員は半減し、農業工学分野では、真木先生、野口先生のお二人しか会員になれませんでした。それでも会員ゼロの分野に比べ、複数の会員は幸運でした。幸いにも、農業工学会は真木会員が会長に就任し、日学の要職（農学基礎委員長）にもなられたことから、本会は、2007年6月に日学で最初の連合体としての学術協力団体の承認を受けました。他方、日学の国際学術団体委員会の委員に野口会員がなられ、CIGR が第一次リストラから免れました。しかし、その査問の過程で、48 全ての国際学術団体の受け皿学会（参加国組織は日学であるが、その実質的な母体学会）が明かにされ、本会がその役目を負うことになりました。本会は、日学と両輪をなして CIGR をハンドリングし、世界の食料問題に貢献する使命を持ちます。

他方、創設以来すべて依存してきた農業農村工学会の事情から、原則各学会回り持ちで、事務局を運営することになりました。最初の当番として、日本生物環境工学会が事務局を引き受けました。村瀬会長が IFAC 元技術委員長、第 21 期会員に改選組みで唯一再任された野口副会長が IFAC 現技術委員長でもあり、CIGR に関する国際化の重責を日学と共同責任を持つ本会としての新たな出発に十分に対応できると考え、引き受けることになりました。

この新しい転機を前向きに捉え、日本農業工学会の年次総会ならびにシンポジウムを参加学会の大会に併せてみるのは如何であろうか。単独の学会あるいは複数の学会で都合が付く学会が同時・同会場で日本農業工学会の傘の下に集まり、農業工学の将来を語り合い、相互のコミュニケーションを緊密にしていくことが出来れば、メリットは少なくないであろう。

5：おわりに

9 年前に第 7 期の会長を引退するに当たり、真木先生を副会長にご推薦したのが昨日のようです。真木先生が日学の要職として、また本会の中興の祖としてご活躍され、25 周年記念を迎え、日学の規則に基づき CIGR の運営を行う新たな時代に入りました。この流れを拝見し、本当に感慨深いものがあります。皆様の益々のご活躍を祈念し、締めくくります。

（日本生物環境工学会名誉会長、農業情報学会名誉会長）

日本農業工学会とC I G R

木谷 収（本会第8代会長）

「日本農業工学会は何のための学会だろう？ 年に1回のシンポジウムしか出たことがないけれど」との声を耳にすることがある。その国内活動は限られている。と言うのも本来国際農業工学会（C I G R）の1国会員として日本が国際活動を行うために作られた学会連合体だからである。

80年近いC I G Rの歴史のほぼ半ばの頃に日本はC I G Rに加入した。当時は農業工学の国際活動に関心を持つ人々が組織を作り会費を集めて、C I G Rの1国会員として参加していた。しかし、会費の徴収が次第に難しくなり、C I G Rへの滞納が重なって日本はついに除名されてしまった。

今から30年近く前のことであろうか、私は何度か農業工学関連の国際会議に出席した。また農業機械関係の国際組織「ボローニャクラブ」の設立に係わることになり、かなり頻繁にヨーロッパでの国際会議に出席していた。ボローニャクラブは、ローマクラブの農業機械化版とも言うべきもので、世界の農業機械化のシンクタンクとして将来に向けての施策・提言を行うことを目的としていた。いまでもこの組織はC I G Rと密接な連携を保って活動を行っている。

これらの国際会議に出るたびに、「なぜ日本はC I G R」に入らないのか？」とよく訊かれた。日本は国力をつけてきており、科学技術国際活動も活発になってきている時であったので、私はそろそろ日本がC I G Rに復帰すべき時だと思った。復帰には、C I G R会則の条件である「1国、1農業工学会」を満たすために農業工学関連学会の連合体を作る必要があった。学会連合体を作るとすれば兄貴分の農業土木学会を軸とすることになるので、当時の同学会の白井清恒会長を中心として6学会、1協会（農業電化）をメンバーとして発足し、1984年に日本は再びC I G Rに復帰した。農業電化協会は、C I G Rの第4部会（農村電化・エネルギー）に対応する組織として加わった。それから、今日まで25年の年月が流れた。

再加盟の後、日本からのC I G R活動への参加は次第に活発になった。私も毎年ヨーロッパで開かれるボローニャクラブに出席しているうちに、C I G R執行部のアジア代表を務めさせられるなど、次第に深みにはまり、1995年に次期会長になり、続いて会長、前会長とそれぞれ任期2年ずつを務めることとなった。技術部会理事も日本から選ばれることが増え、日本からの部会長や副部会長も次々と活躍されるようになった。ここ十数年間は総ての部会に理事を日本から出している。

C I G Rに対する日本の立場を強めた最大のきっかけは、1995年に日本学術会議がC I G Rに加入したことである。1993年にはアジアで初めてのC I G R総会が東京で開かれ、日本学術会議第6部会の中川昭一郎部長のお力で、加入を促進すべくC I G Rのペリッツ会長と日本学術会議近藤次郎会長との会談が実現した。またこのC I G R総会の折に、当時の日本農業工学会佐野文彦会長の英断で、2000年にC I G R 70周年記念の世界大会を日本で開くことが提案され、第14回のC I G R World Congressとして承認された。

2000年世界大会は大会運営委員会の橋本康委員長、開催地委員会の前川孝昭委員長を

はじめとする日本農業工学会関係の多くの方々のお力で成功裏に終えることができた。組織委員長として日本学術会議の主催・支援申請のヒアリングに出たところ、ライバル申請団体代表の元会長近藤次郎先生と鉢合わせになり、これは手強いと心配したが、幸い採択されほっとした。

その後、ドイツのボンにおかれたC I G R事務局が8年間の任務を終え、次は日本で引き受けてもらえないかと当時のC I G R会長から突然の依頼があった。農林水産省傘下の大きな研究所で引き受けてもらえないか打診したがだめであった。では大学関係で受けてもらえるところをとのことで声をかけたところ、2000年C I G R大会の開催地の筑波大学が紆余曲折の後、引き受けてくれることになり、選挙で前川孝昭教授が事務長に選ばれ2006年から4年の任期でC I G Rの中樞を動かすことになった。去る9月のブラジルでのC I G R総会で、次期2010～2013年の4年間は北海道大学がC I G R事務局を引き受け、同大学の木村俊範教授が事務局長に選ばれ、就任の予定である。

C I G R事務局は、会員国が100を数えるようになった今日、その運営は誠に大変で、事務局長と設置大学のご苦労は並大抵ではない。しかし事務局は、世界の農業工学の中心であり、情報も集中するし、日本として大きな国際貢献になるとともに、日本の農業工学分野のさらなる発展の拍車となる可能性も大きい。昨今はネットワークによって空間と時間を越えて、遠くの人々も協力できる仕事も少なくない。また、それぞれの学会活動やC I G Rの国際会議の主催、共催、参加などを通じて、2013年まで日本に置かれるC I G R事務局を直接・間接にサポートして頂けるよう心から願っている。

2011年には、C I G Rの7技術部会を総合した国際シンポジウムを東京で開催することが、去る9月の総会で決まった。これは、C I G R事務局が日本にある時代を象徴し、盛り上げ、仕上げをする会議と期待されている。振り返ってみると、79年のC I G Rの歴史で、60数年は事実上欧米の学会連合であった。事務局は創立以来ヨーロッパの国々で引き受けられ、総会の場所や会長、事務局長も欧米からに限られていた。欧米以外の最初の総会、会長、事務局と事務局長はすべて日本からであった。日本がC I G Rの本当のグローバル化の推進役を果たしてきたと誇ってよいと思う。

先進国では農業工学の将来について危ぶむ人もいるが、むしろますます必要になってきていると思う。地球環境問題や世界経済危機を前にして世界は変革を迫られており、その中で、農業工学が果たさなければならない役割が増えつつあるからである。農業工学は農のエンジニアリングであり、農に応用すべき基礎科学が生命科学、情報科学、物質科学など次々と進化し、また応用すべき側面も環境問題、資源問題、南北問題などの深刻化にともなって深化、多様化してきているからである。たとえば、温室効果ガス削減のためのバイオエネルギー生産は、食料との競合、エネルギー収支、経済性などの問題解決を迫られており、関連する技術やシステムの多くは農業工学分野と重なるものである。それはまた、人類の究極の問題である貧困、飢餓、紛争をなくす一里塚の1つでもある。世界の人々のための農業工学の発展を祈りたい。

(筆者：日本大学大学院総合科学研究科教授、東京大学名誉教授、C I G R名誉会長)

渾沌と革新にゆれた第9期

中野 政詩（本会第9代会長）

第9期は、課題ばかり抱えて右往左往していた期であったように思えます。この時期、未来に向けて学術の枠組みをチェンジしようという歴史の1ページを飾るような革新の仕上げの最終段階にあり、内閣府総合科学技術会議の意見を戴して日本学術会議の改革の姿がおおよそ見えるようになりかけていたところでした。その中では、日本学術会議のあり方として、社会への提言、人文科学と自然科学の融合、国際交流等が更にいっそう発揮されることが望ましいと考えられ、細分化され尖鋭化された個別専門分野の連携や大括りが強調されていました。日本農業工学会は、革新された学術の枠組みの中でどのような位置づけが与えられ、どのような運営をし、どのような活動をするべきなのでしょう。今もそうだと思いますが、当時はことさら真剣に考えねばならなかった時代でした。

日本農業工学会は、稲作農業から畑作農業そして酪農さらに人工環境下の農業を包括する日本農業の近代的営みを担う総合の学術として農業工学を考える先達の叡智により、細分化され先鋭化した個別学術を担う専門学会が一堂に会する連合体として発足し、そのように運営されてきましたので、幸いにも専門分野の連携や大括りといった側面では先駆的かつ優等生的な存在であると自負したものでした。

とは言え、日本学術会議の改革の中では、簡単に言ってしまえば、学術団体についてこれを協力学術研究団体として位置づけ、その認定をして関係を結ぶことが考えられていました。そこで不安を覚えたことはCIGRとの関係でした。それまで日本農業工学会は日本学術会議のCIGR 専門委員会国際農業工学会小委員会と緊密な関係をもって国際的に対応していました。この日本学術会議の改革の中で日本農業工学会が協力学術研究団体として認定を受け、従前と同様な形で国際対応がとれるかどうか不安がありました。認定を受けるには個人会員100人以上を擁する団体と言う条件がついていました。当時国際会員をもってこれにあてると101人でした。もし認定されなければ国際交流の窓が一つ閉ざされることとなります。随分心配したことを覚えています。後になって次の期の真木太一会長の努力の下でこの認定を受け、滞りなく国際対応が進んでいることを聞き安堵した次第です。

CIGR と言えば、事務局長を日本で持ち、そのお膝元で事務局を主宰するという話が入ってきました。筑波大学前川孝昭教授（当時）が事務局長をお引き受けになり、2006年の1月にCIGR事務局が筑波大学に設置されることになりました。日本農業工学会は、この事務局とどういった関係を築き、どういった付き合いをしたらよいのでしょうか。現在もそうだと思いますが、日本農業工学会はCIGRの下部機関ではありませんでした。日本固有の独立した学術組織でした。日本農業工学会とこのCIGRとの関係はどういうことになるのでしょうか。CIGRを支援することでしょうか、CIGRに協力するのでしょうか。共同でしょうか。協同でしょうか。はたまた、CIGRと連携でしょうか。連帯でしょうか。随分と考え悩まされたことを覚えています。

結論を得ないまま、その年の3月に新事務局が開所式と記念シンポジウムを開催されました。CIGRの関係者を除けば海外からの参加者は数を見込めないと想像され少人数の参加者のシンポジウムは如何なものかと思われました。そこで日本農業工学会から多数参加して盛大な会合になればと考え、日本農業工学会を構成する諸学会からの多数のご参集を期待しました。蓋を開けてみたところ、人数はまあまあ揃って形は整っていましたが、その内訳は農業機械と農業施設を専門とする関係者と筑波大学で学ぶ学生諸氏で大部分が占められ、分野別に見ると偏っていたという次第でした。日本農業の近代的営みを担う総合の学術としての農業工学の学術を先導する日本農業工学会として、また関係者としてこれでよいものだろうかと先行きについて強烈な心配と不安がよぎったことを今でも忘れる事が出来ないでいます。翻って、日本農業工学会が個別専門的な学術情報の共有をはかって毎年開催しているシンポジウムではどうだったのでしょうか。これも出席者は分野別には片寄っていたように記憶します。現在はいかがでしょうか。やはり出席分野の偏りは起きているのでしょうか。全分野から均等に出席者が集まることが将来の本学会の発展に向けては大切なことかもしれないと今ひそかに思います。

もうひとつ記憶に残っていることがあります。当時技術者に基礎学力が欠けている、あるいは問題の提起と解決の能力がない等という識者からの厳しい指摘が斯界に浴びせられていました。国際プロジェクトの遂行に責任を持てる技術者がほしいという強い社会的要望もありました。それやこれやで、大学の技術者教育プログラムを認定することにより技術者の質を保証し、国際的な同等性や互換性を満たす技術者を養成することが出来るという認識の下で日本技術者教育認定機構(JABEE)が精力的に大学の教育プログラムの認定を進めていました。その動向に日本農業工学会を構成する専門学会も沿ってゆくために、これに関する情報の交換と共有、事例の検討等にかかなりの時間を掛けたことを覚えています。東京大学田中忠次教授(当時)が専らこの問題に取り組み、ご苦労されていたことを覚えています。現在では、この技術者教育認定に関する活動が各専門学会の中で具体化され定着し、各学会がエンジニアリングとは何かに思いをいたし、技術者の教育に資するための活動を進め、日本の農業工学技術者の質の向上に優れて貢献していると聞き喜んでいるところです。

今さら言うまでもなく、農業や環境に関する農業工学の実技の場面は日本のみならず世界に広がっています。そこには人がいます。そして社会があります。人を抜きにして社会に目を瞑っては、農業工学は功を奏することはありえないでしょう。農業や環境に関して農業工学が社会に先導的な提言をすることは当然です。実技の場で人文科学と自然科学との融合は必然です。発達した個別専門学術の総合的かつ融合的な展開は不可欠なことです。そして、この学術の国際交流・国際展開はグローバリゼーションの中で自然の流れです。農業工学が学術の場で、日本農業工学会が学術体系の枠組みの中で、日本農業と世界農業そして地球環境に有益な役割を果たすものとして強く認知され位置づけられることが望まれます。日本農業工学会がそのために引き続きご尽力されることをいま祈念しています。

9. 日本農業工学会歴代役員一覧

第Ⅰ期 (昭和59年6月～61年6月)

会 長 白井 清恒 (土木) (59.7～61.6)
副会長 角田 公正 (作業) (59.7～61.6)
副会長 木谷 収 (機械) (59.7～61.6)
理 事 進藤 純男 (電化) (59.7～61.6)
理 事 森嶋 博 (施設) (59.7～61.6)
理 事 高倉 直 (生環) (60.5～61.6)
監 事 久保 祐夫 (気象) (59.7～61.6)

第Ⅱ期 (昭和61年6月～63年5月)

会 長 須藤 清次 (土木) (61.5～63.5)
副会長 佐野 文彦 (機械) (61.5～63.5)
副会長 森嶋 博 (施設) (61.5～63.5)
理 事 井村 光男 (電化) (61.5～63.5)
理 事 米村 純一 (作業) (61.5～63.5)
理 事 高倉 直 (生環) (61.5～63.5)
監 事 渡部 一郎 (気象) (61.5～63.5)

第Ⅲ期 (昭和63年5月～平成2年5月)

会 長 角屋 睦 (土木) (63.5～2.5)
副会長 佐野 文彦 (機械) (63.5～2.5)
副会長 森嶋 博 (施設) (63.5～元.5)
" 船田 周 (施設) (元.5～2.5)
理 事・事務局長
中川昭一郎 (会長推薦) (63.5～2.5)
理 事 春原 亘 (作業) (63.5～2.5)
理 事 高倉 直 (生環) (63.5～元.5)
理 事 橋本 康 (生環) (元.5～2.5)
監 事 渡部 一郎 (気象) (63.5～元.5)
" 内島 立郎 (気象) (元.5～2.5)
監 事 井村 光男 (電化) (63.5～元.5)
" 成田 勝彦 (電化) (元.5～2.5)

第Ⅳ期 (平成2年5月～平成4年5月)

会 長 中川昭一郎 (土木) (2.5～4.5)
副会長 船田 周 (施設) (2.5～4.5)
副会長 春原 亘 (作業) (2.5～4.5)
理 事・事務局長
木谷 収 (機械) (2.5～4.5)

理 事 橋本 康 (生環) (2.5～4.5)
理 事 北村 貞太郎 (計画) (2.5～4.5)
監 事 内島 立郎 (気象) (2.5～3.5)
監 事 中山 敬一 (気象) (3.5～4.5)
監 事 成田 勝彦 (電化) (2.5～4.5)

第Ⅴ期 (平成4年5月～平成6年5月)

会 長 佐野 文彦 (機械) (4.5～6.5)
副会長 中野 政詩 (土木) (4.5～6.5)
副会長 下田 博之 (作業) (4.5～6.5)
理 事・事務局長 (会長推薦)
久保 七郎 (4.5～6.5)
理 事 橋本 康 (生環) (4.5～6.5)
理 事 木谷 収 (会長推薦) (4.5～6.5)
理 事 北村貞太郎 (計画) (4.5～6.5)
理 事 奈良 誠 (施設) (4.5～5.5)
理 事 相原 良安 (施設) (5.5～6.5)
監 事 中山 敬一 (気象) (4.5～6.5)
監 事 小林 孝一 (電化) (4.5～6.5)

第Ⅵ期 (平成6年5月～平成9年5月)

会 長 田渕 俊雄 (土木) (6.5～9.5)
副会長 木谷 収 (機械) (6.5～9.5)
副会長 橋本 康 (生環・植工) (6.5～9.5)
理 事・事務局長 (会長推薦)
白石 英彦 (6.5～9.5)
理 事 坂井 直樹 (作業) (6.5～9.5)
理 事 前川 孝昭 (施設) (6.5～9.5)
理 事 相賀 一郎 (CELSS) (6.5～9.5)
理 事 古在 豊樹 (気象) (6.5～9.5)
理 事 岡本 嗣男 (会長推薦) (6.5～9.5)
監 事 安富 六郎 (計画) (6.5～9.5)
監 事 小林 孝一 (電化) (6.5～7.5)
監 事 山田 弘 (電化) (7.5～9.5)

第Ⅶ期 (平成9年5月～平成12年5月)

会 長 橋本 康 (植工) (9.5～12.5)
副会長 中村 良太 (土木) (9.5～12.5)
副会長 長島 守正 (施設) (9.5～12.5)

理事・事務局長（会長推薦）

白石 英彦(9.5~12.5)
理事 相賀 一郎 (CELSS) (9.5~12.5)
理事 岡本 嗣男 (機械) (9.5~12.5)
理事 木谷 収 (会長推薦) (9.5~12.5)
理事 古在 豊樹 (生環) (9.5~12.5)
理事 世良田和寛 (作業) (9.5~12.5)
理事 真木 太一 (気象) (9.5~12.5)
理事 塩 光輝 (情報) (9.5~12.5)
監事 安富 六郎 (計画) (9.5~12.5)
監事 相木 千尋 (電化) (9.5~11.9)
監事 長坂 陽一 (電化) (11.9~12.5)

第Ⅶ期 (平成12年5月~平成15年5月)

会長 木谷 収 (機械) (12.5~15.5)
副会長 中村 良太 (土木) (12.5~15.5)
副会長 真木 太一 (気象) (12.5~15.5)
理事 大政 謙次 (生態) (12.5~15.5)
理事 蔵田 憲次 (生環) (12.5~15.5)
理事 古在 豊樹 (植工) (12.5~15.5)
理事 塩 光輝 (情報) (12.5~15.5)
理事 世良田和寛 (作業) (12.5~15.5)
理事 前川 孝昭 (施設) (12.5~15.5)
理事・事務局長

岩崎 和己(会長推薦) (12.5~15.5)
理事 田中 忠次(会長推薦) (12.5~15.5)
監事 富田 正彦 (計画) (12.5~15.5)
監事 長坂 陽一 (電化) (12.5~13.5)
" 花形 将司 (電化) (13.5~15.5)

第Ⅸ期 (平成15年5月~平成18年5月)

会長 中野 正詩 (土木) (15.5~18.5)
副会長 真木 太一 (気象) (15.5~18.5)
副会長 前川 孝昭 (施設) (15.5~18.5)
理事 大政 謙次 (生態) (15.5~18.5)
理事 村瀬治比古 (植工) (15.5~18.5)
理事 蔵田 憲次 (生環) (15.5~18.5)
理事 世良田和寛 (作業) (15.5~18.5)
理事 笹尾 彰 (機械) (15.5~18.5)
理事 町田 武美 (情報) (15.5~18.5)

理事・事務局長

岩崎 和己(会長推薦) (15.5~18.5)
理事 田中 忠次(会長推薦) (15.5~18.5)
監事 富田 正彦 (計画) (15.5~18.5)
監事 花形 将司 (電化) (15.5~18.5)

第Ⅹ期 (平成18年5月~平成21年5月)

会長 真木 太一 (気象) (18.5~21.5)
副会長 村瀬治比古 (植工) (18.5~19.5)
(事務局長) " (生工) (19.5~21.5)
副会長 駒村 正治 (土木・農工)
(18.5~21.5)
理事 前川 孝昭 (施設) (18.5~21.5)
理事 大政 謙次 (生態) (18.5~21.5)
理事 橋本 康 (生環) (18.5~18.12)
(会長推薦) (19.5~21.5)
理事 米川 智司 (作業) (18.5~21.5)
理事 笹尾 彰 (機械) (18.5~21.5)
理事 町田 武美 (情報) (18.5~21.5)

理事・事務局長

岩崎 和己(会長推薦) (18.5~20.5)
理事 野口 伸(会長推薦) (20.5~21.5)
監事 花形 将司 (電化) (18.5~20.5)
" 松岡 修 (電化) (20.5~21.5)
監事 千賀裕太郎 (計画) (18.5~21.5)

第ⅩⅠ期 (平成21年5月~平成24年5月)
(予定)

会長 町田 武美 (情報) (21.5~24.5)
副会長 村瀬治比古 (生工) (21.5~24.5)
副会長 中 達雄 (農工) (21.5~24.5)
理事 真木 太一 (気象) (21.5~24.5)
理事 澁澤 栄 (機械) (21.5~24.5)
理事 志賀 徹 (施設) (21.5~24.5)
理事 石田 憲治 (計画) (21.5~24.5)
理事 大政 謙次 (生態) (21.5~24.5)
理事 野口 伸(会長推薦) (21.5~24.5)
理事 岸田 義典(会長推薦) (21.5~24.5)
監事 堀尾 尚志 (作業) (21.5~24.5)
監事 松岡 修 (電化) (21.5~24.5)

10. 日本農業工学会シンポジウム一覧

第1回「農業工学と国際協力」

昭和 60(1985)年 5 月、農業土木会館

- | | | |
|---------------|----------------|------|
| 1. 農業工学と国際協力 | 田内 堯 (国際協力事業団) | (土木) |
| 2. 農業土木と国際協力 | 北村貞太郎 (京都大学) | (計画) |
| 3. 国際協力の精神と意義 | 細川 明 (宇都宮大学) | (機械) |
| 4. 農業工学と国際協力 | 杉 二郎 (東京農業大学) | (生環) |

第2回「農業工学とエネルギー」

昭和 61(1986)年 5 月、農業土木会館

- | | | |
|---------------------|------------------|------|
| 1. 農業土木技術とエネルギー | 桜井喜十郎 (三重大学) | (土木) |
| 2. 農業機械とエネルギーの高効率利用 | 木谷 収 (東京大学) | (機械) |
| 3. 農業施設における代替エネルギー | 山沢 新吾 (日本大学) | (施設) |
| 4. 農業施設における省エネルギー技術 | 山本雄二郎 (電力中央研究所) | (電化) |
| 5. 農作業の省エネルギーと低コスト化 | 加藤 雄久 (北海道農業試験場) | (作業) |

第3回「農業生産における土と水」

昭和 62(1987)年 5 月、農業土木会館

- | | | |
|--------------------------|--------------------|------|
| 1. 土地利用型農業における土と水 | 岩田 進午 (農業土木試験場) | (土木) |
| 2. 農業機械化からみた土と水の問題 | 佐藤 清美 (石川島芝浦機械(株)) | (機械) |
| 3. 農法転換をもたらした土と水をめぐる技術革新 | 塩谷 哲夫 (北陸農業試験場) | (作業) |
| 4. 施設を利用した無土壌農業 | 鈴木 芳夫 (筑波大学) | (施設) |
| 5. 野菜工場の研究開発状況と今後の課題 | 関山 哲雄 (電力中央研究所) | (電化) |

第4回「21世紀にむけての農業工学研究」

昭和 63(1988)年 5 月、農業土木会館

- | | | |
|-----------------|-----------------|------|
| 1. 農業土木の研究ビジョン | 白石 英彦 (農業土木試験場) | (土木) |
| 2. 次世代農業における情報化 | 橋本 康 (愛媛大学) | (生環) |
| 3. 農業機械学の将来像 | 川村 登 (京都大学) | (機械) |
| 4. 農作業研究のあり方と方向 | 春原 亘 (東京大学) | (作業) |

第5回「バイオテクノロジーと農業工学」

平成元(1989)年 5 月、農業土木会館

- | | | |
|---------------------|------------------|------|
| 1. バイオテクノロジーとロボット | 岡本 嗣男 (東京大学) | (機械) |
| 2. バイオ・ナーサリーシステムの開発 | 長岡 正昭 (野菜・茶業試験場) | (気象) |
| 3. 大量苗生産と農作業 | 坂上 修 (東北農業試験場) | (作業) |
| 4. 野菜工場の研究開発状況 | 関山 哲雄 (電力中央研究所) | (生環) |

第6回「低コスト農業と農業工学」

平成 2(1990)年 5 月、農業土木会館

- | | | |
|--------------------------|-------------------|------|
| 1. 低コスト生産を目指した大区画水田圃場整備 | 山路 永司 (東京大学) | (土木) |
| 2. 大規模超省力水田生産技術の展開 | 川崎 健 (農業研究センター) | (作業) |
| 3. 農業機械化による 3 割コストダウンへの道 | 山下 律也 (京都大学) | (機械) |
| 4. 畜産施設 (畜舎) の低コスト化 | 上野 克美 (農業共同組合連合会) | (施設) |

第 7 回「農業・農村環境と農業工学」

平成 3(1991)年 5 月、農業土木会館

- | | | |
|-------------------------|------------------|------|
| 1. 田園工学としての課題 | 千賀裕太郎 (東京農工大学) | (土木) |
| 2. 農業環境と農業機械 | 道宗 直昭 (生研機構) | (機械) |
| 3. 畜産バイオマスの再資源化と技術開発の動向 | 前川 孝昭 (筑波大学) | (施設) |
| 4. 気象資源の評価法と利用上の問題点 | 清野 裕 (農業環境技術研究所) | (気象) |
| 5. 農村における快適住居環境 | 藤本 信義 (宇都宮大学) | (計画) |

第 8 回「情報化時代における農業工学」

平成 4(1992)年 5 月、農業土木会館

- | | | |
|-----------------------|-----------------|---------|
| 1. 人口知能の作業管理への応用を考える | 蔵田 健次 (東京大学) | (生環・気象) |
| 2. 農業水利における情報化の現状と問題点 | 丹治 肇 (農業工学研究所) | (土木) |
| 3. 成苗化施設設計支援システム | 向 弘之 (農業工学研究所) | (施設) |
| 4. 農業情報ネットワークの現状と将来展望 | 町田 武美 (茨城大学) | (機械) |
| 5. 農村景観の再現と予測 | 松尾 芳雄 (農業工学研究所) | (計画) |

第 9 回「環境調和・持続型農業と農業工学」

平成 5(1993)年 5 月、農業土木会館

- | | | |
|-------------------------|------------------|------|
| 1. 食糧生産に伴う地球温暖化ガスの放出吸収 | 志村 博康 (日本大学) | (土木) |
| 2. 環境資源からみた作物生産過程 | 高見 晋一 (北陸農業試験場) | (気象) |
| 3. 施設型植物生産と持続型農業 | 古在 豊樹 (千葉大学) | (生環) |
| 4. 生産系調和型農業における農業機械化の課題 | 古川 嗣彦 (農業研究センター) | (機械) |
| 5. 持続可能な農作物生産の課題 | 塩谷 哲夫 (東京農工大学) | (作業) |

第 10 回「農業生産におけるセンサー・計測技術」

平成 6(1994)年 5 月 13 日、農業土木会館

- | | | |
|-------------------------|-------------------|---------|
| 1. 農用地の土層探査技術 | 竹内 睦雄 (農業工学研究所) | (土木) |
| 2. 作業姿勢のセンシングと計測技術 | 小林 恭 (農業研究センター) | (作業) |
| 3. 農作業用ロボットにおけるセンシング技術 | 鳥居 徹 (東京大学) | (機械) |
| 4. 青果物の非破壊検査におけるセンシング技術 | 前田 弘 (果実非破壊品質研究所) | (施設) |
| 5. 植物機能の画像診断技術 | 大政 謙次 (国立環境研究所) | (生環・気象) |

第 11 回「高付加価値化と農業工学」

平成 7(1995)年 5 月 14 日、農業土木会館

- | | | |
|-----------------------|----------------------------|------------|
| 1. 農業農村整備の新たな展開 | 小泉 健 (農業工学研究所) | (土木) |
| 2. 農業施設と付加価値 | 河野 澄夫 (食品総合研究所) | (施設) |
| 3. ロボットによる接ぎ木苗生産 | 鈴木 正肚 (生研機構) | (機械) |
| 4. 環境調節における花卉の高付加価値生産 | 奥矢 明子 (横川電機(株)) | (生環・気象・植工) |
| 5. 高付加価値生産による農村振興 | 生方 里子・千明 孝一 (吾妻農業改良普及センター) | (作業) |

第12回「地域・農村文化と農業工学」

平成8(1996)年5月15日、農業土木会館

- | | | |
|----------------------------|-----------------|------|
| 1. 地域・農村文化と農業土木 | 川尻裕一郎 (農業工学研究所) | (土木) |
| コメント | 楠木 侑司 | |
| 2. 地域・農村文化を支えてきた農業機械の今後の役割 | 岸田 義典 (新農林社) | (機械) |
| コメント | 塩谷 哲夫 (東京農工大学) | |
| 3. 農耕文化と環境 | 矢吹 萬壽 (大阪府立大学) | (生環) |
| コメント | 中川昭一郎 (東京農業大学) | |

第13回「農業工学における教育」

平成9(1997)年5月16日、農業土木会館

- | | | |
|----------------------|---------------|---------|
| 1. 社会のニーズと大学教育 | 佐藤 晃一 (愛媛大学) | (土木) |
| 2. 農業機械の教育 | 寺尾日出男 (北海道大学) | (機械) |
| 3. 農業施設教育の現状とその新しい試み | 前川 孝昭 (筑波大学) | (施設) |
| 4. 生物環境工学の教育 | 高倉 直 (長崎大学) | (生環・気象) |

第14回「大型農業と農業工学」

平成10(1998)年5月20日、農業土木会館

- | | | |
|------------------------|------------------|------|
| 1. 大規模農業と土地改良 | 山路 永司 (東京大学) | (土木) |
| 2. 大区画圃場の機械作業 | 高井 宗宏 (北海道大学) | (機械) |
| 3. 大区画圃場における水稻直播作業体系 | 北倉 芳忠 (福井県) | (作業) |
| 4. 農業気象からみた大規模農業 | 山田 一茂 (北海道農業試験場) | (気象) |
| 5. 大型農業を担う青果物選別システムの動向 | 相良 泰行 (東京大学) | (施設) |

第15回「環境調和と農業工学」

平成11(1999)年5月21日、農業土木会館

- | | | |
|----------------------------------|------------------|------|
| 1. 再資源炭の活用による資源環境と環境保全のための農村基盤技術 | 小泉 健 (農業工学研究所) | (土木) |
| 2. カバークロップの植物機能を利用した農耕地の環境整備 | 荒木 肇 (新潟大学) | (作業) |
| 3. 農業気象的手法を利用した持続的作業栽培管理 | 井上 君夫 (農業研究センター) | (気象) |
| 4. 環境調和を考慮した農業系未利用資源の利活用 | 松田 従三 (北海道大学) | (施設) |

第16回「農業工学における高度情報利用」

平成12(2000)年5月19日、農業土木会館、(農業情報学会)

1. 田園地域マルチメディアの現状と展望 丹治 肇 (農業工学研究所)
2. 地域情報ネットワークによる農業情報利用ー地域特性と情報格差ー
中山 守 (熊本大学)
3. 精密農法における情報利用 澁澤 栄 (東京農工大学)
4. 植物生産現場における環境計測データ活用のためのソフトウェア技術ーデータマイニング・モデリング・規格化 星 岳彦 (東海大学)

第17回「21世紀の食料生産と農業工学」

平成13(2001)年5月18日、農業土木会館、(農業土木学会)

1. 地球温暖化と食料生産ー気候変化の中での地域資源の変容ー
春山 成子 (東京大学)
2. アジアの稲作から見た食糧問題と課題 堀江 武 (京都大学)
3. 21世紀初頭における経済社会の変化と農業土木事業の展開
元杉 昭男 (中国四国農政局)
4. 農工融合技術戦略によるテトラレンマの攻略 伊藤 信孝 (三重大学)
5. 寒冷地における米の高品質貯蔵 伊藤 和彦 (北海道大学)

第18回「南北問題と農業工学」

平成14(2002)年5月17日、農業土木会館、(農業機械学会)

1. アジアの地域経済活性化における技術導入・技術移転問題
徳本 靖 ((株)徳本適正技術研究所)・米山 正博 (JICA アジア第1部)
2. 農業機械に係る技術協力 八木 茂 (元生研機構畜産工学部)
3. 南北問題と農業・農村開発協力 八丁 信正 (近畿大学農学部)
4. 熱帯地域の森林破壊と修復について 長野 敏英 (東京農業大学国際情報学部)
5. ディスカッションパネルと総合討論
(海外出身のパネリストによるプレゼンテーション)
 - (1)ラオスの事情と南北問題 院多本 華夫 (筑波大学農林工学系)
 - (2)農業機械分野における適正技術移転および実例 櫻井 文海
(つくば国際センター業務第二課)
 - (3)バングラディッシュにおける農業発展の潜在性と弱点
Kingshuk ROY (日本大学生物資源科学部)

第19回「地球環境問題と農業生産環境の改善」

平成15(2003)年5月16日、農業土木会館、(日本農業気象学会)

1. リモートセンシングの最新技術と環境・農業分野への利用
大政 謙次

(東京大学大学院農学生命科学研究科)

2. 熱帯モンスーンにおける耕地の蒸発散・熱収支変動と水資源・災害
青木 正敏 (東京農工大学農学部)
3. 中国の環境問題としての沙漠化・黄砂の防止法と緑化技術の方向性
真木 太一 (九州大学大学院農学研究院)
4. 中央アジア灌漑農地の塩類集積による水土の劣化と改善対策
北村 義信 (鳥取大学農学部)

日本農業工学会創立 20 周年記念シンポジウム

第 20 回「循環型社会形成と地域産業の振興」

平成 16(2004)年 5 月 14 日、農業土木会館、(農業施設学会)

1. バイオマス利活用と農村振興
寶井 正樹
(農林水産省農村振興局整備部)
2. バイオマスの炭素固定能を活用した循環型社会の構築とその評価方法
杉浦 則夫 (筑波大学農林工学系)
3. 循環型社会における資源有効利用の変遷と実践
松山 正彦 (名古屋女子大学)
4. 自然エネルギー利用と循環型社会
東城 清秀
(東京農工大学大学院共生科学技術研究院)
5. 栽培漁業と藻類培養に関連する生物環境調節の役割と循環型社会への貢献
村上 克介 (三重大学生物資源学部)

第 21 回「環境型持続的生物生産への挑戦」

平成 17(2005)年 5 月 13 日、農業土木会館、(日本農作業学会)

1. 農業労働の継続的改善ツール
菊池 豊
(生物系特定産業技術研究支援センター)
2. カバークロップを活用した持続的農業のデザイン
小松崎将一 (茨城大学農学部)
3. 再生資源としてのナシの剪定枝の有効利用
飯本 光雄 (千葉大学園芸学部)
4. 「食の安全・安心」政策とトレーサビリティシステム
池口 厚男 (農業工学研究所)

第 22 回「食料生産エンジニアリングの新展開」

平成 18(2006)年 5 月 12 日、農業土木会館、(日本生物環境調節学会)

1. フィールドサーバ
平藤 雅之 ((独)農業・生物系特定産業技術
研究機構中央農業総合研究センター)
2. ユビキタス環境制御システムによるインテリジェント低コスト温室
星 岳彦 (東海大学開発工学部)
3. 農地における土壌侵食問題と地域環境保全技術ー沖縄赤土流出問題に着目してー
大澤 和敏
(東京工業大学大学院理工学研究科)
4. カオス・複雑系の生態情報学ー農工融合のアプローチー

酒井 憲司

(東京農工大学大学院共生科学技術研究院)

5. 自然冷気を利用した新規貯蔵技術（超低温貯蔵）の開発

川村 周三(北海道大学大学院農学研究科)

第 23 回「農山村再生における“景観”」

平成 19(2007)年 5 月 11 日、農業土木会館、(農業土木学会・農村計画学会)

1. 景観から地域コミュニティを読むー近江八幡からバリ島へー

大橋 力

((財)国際科学振興財団文明科学研究所)

2. 意味ある景観を読むー〈庭〉と〈島〉の農業空間

小野 芳朗(岡山大学大学院環境学研究科)

3. 土地・水利用が織る田園風景ー形成と維持

千賀裕太郎

(東京農工大学大学院共生科学技術研究院)

4. 「農」の風景の意義と保全利用

進士五十八(東京農業大学地域環境科学部)

第 24 回「農業工学分野における地理空間情報の利用」

平成 20(2008)年 5 月 9 日、農業土木会館、(生態工学会・農業情報学会)

1. リモートセンシングを基軸とした農地空間の情報化とその利用

野口 伸

(北海道大学大学院農学研究科)

2. 空間情報を活用した低コスト草地整備法

梅津 裕

(北海道大学大学院農学研究科)

3. GIS を活用した不定広域流出モデルによるため池群の洪水軽減効果の評価

吉迫 宏 ((独)農業・食料産業技術総合

研究機構農村工学研究所)

4. 湿原・河川敷における生物多様性保全のための空間情報解析

清水 庸

(東京大学大学院農学生命科学研究科)

日本農業工学会創立 25 周年記念シンポジウム (予定)

第 25 回「食料生産分野におけるイノベーションテクノロジー」

平成 21 (2009) 年 5 月 22 日、東京大学弥生会館、(日本生物環境工学会)

1. 危機下における日本農業と農業機械の役割

澁澤 栄(東京農工大学)

2. 農業・環境リモートセンシング

大政 謙次(東京大学)

3. 持続可能な農業農村のためのイノベーションテクノロジー

宮崎 毅(東京大学)

4. 太陽光利用型植物工場の知能化のための Speaking Plant Approach 技術

仁科 弘重(愛媛大学)

5. 閉鎖型植物工場の未来像

村瀬治比古(大阪府立大学)

1 1. 日本農業工学会の顕彰（フェロー）

（1）日本農業工学会フェロー規程

1999年5月21日制定

2001年12月11日改定

（目的）

第1条 管理運営、その他の活動を通じて、日本農業工学会（以下本会という）の関与する分野の学問技術の発展に継続的に顕著な功績のあった者を顕彰するため、フェローの称号を設ける。

（身分）

第2条 フェローは称号であって会員の種別ではない。ただし、フェローの称号を得たものをフェローと呼称することができる。

（資格）

第3条 フェローの称号を授与されるものは傘下の各学会から選出の役員の推薦に基づき、フェロー選考委員会及び日本農業工学会理事会の議を経て推薦された者とする。

2. フェローの称号を授与されたものは、日本農業工学会が返還を求めない限りフェローの称号を保持することができる。

（選考）

第4条 フェローの選考については別に定める。

（顕彰）

第5条 新たにフェローの称号を受けるものには称号授与の証状およびバッジを呈すると共に、その氏名・業績及び顕彰理由を総会で告知する。

付 則

第6条 本規程は1999年5月21日から施行する。

（2）日本農業工学会フェロー選考規則

1999年5月21日制定

2001年12月11日改定

2003年8月20日改定

2004年5月14日改定

（目的）

第1条 本規則は、フェロー規程第5条に基づき、フェローの選考の方法を定めるものである。

（方針）

第2条 フェローの称号は、フェロー規程第1条に示す活動項目に関する継続的な功績に対して授与することを選考の方針とする。

(推薦)

第 3 条 日本農業工学会（以下本会という）役員は、フェロー選考審査会基準に則り、フェローの候補者を 1 年にその役員が所属する団体の有する会員数の 0.1%（ただし端数は切り上げ）を上限とした人数までの候補者を推薦することができる。

2. 前項の推薦にあたって、推薦者は別紙様式 1 による推薦書を毎年 9 月 30 日までにフェロー選考委員会に提出する。

(審査)

第 4 条 推薦者は被推薦者について 3 人以上 5 人以下の審査員をフェローの中から選定し、審査を依頼する。ただし、審査員には被推薦者と異なる機関に属するものが半数以上含まれているものとする。

2. 審査員は推薦書に基づき被推薦者について審査を行い、その結果を別紙様式 2 によりフェロー選考委員会に報告する。

3. 定められた期限までに 3 人以上の審査員から審査結果がフェロー選考委員会の報告されることを以て審査が完了したものとする。

4. 審査が完了しない推薦は無効とする。

(選考)

第 5 条 会長はフェローを選考するため、フェロー選考委員会（以下委員会という）を設置する。

2. 委員会の委員の数は 5 人とし、理事会の議を経て会長が指名する。

3. 委員の候補者および委員の氏名は公開しない。

4. 委員の任期は 3 年とする。

5. 委員会に委員長及び副委員長をおく。委員長および副委員長は委員の互選による。委員長は委員会を召集しその議長となる。副委員長は委員長を補佐し、委員長に事故ある時は、その職務を代行する。

6. 委員会は定められた審査基準に基づき、推薦書及び審査結果について審議の上、フェローの称号を授与するのが適当と認めた候補者を選考し、その結果を会長に報告する。

7. 委員会の議事は公開しない。その他委員会の運営に必要な事項は委員会において定める。

8. 委員会の報告を受けた会長は、理事会の議を経て、フェローの称号を授与するものを決定する。

付 則

第 6 条 初回においては、第 3 条の推薦、第 5 条の選考は理事会が代行する。

第 7 条 本規程は 1999 年 5 月 21 日から施行する。

第 8 条 平成 17、18 年度は、本規則第 3 条の 0.1%推薦枠にかかわらずフェローの候補者を推薦することができる。

12. 日本農業工学会フェロー・功績賞受賞者

(1) 日本農業工学会フェロー受賞者 (平成11年度～20年度) (合計194名)

受賞年度 (受賞者数) (総会報告年月日)

平成11年度 (19名)		川村 登
平成12(2000)年5月19日	平成13年度 (11名)	堂腰 純
岡本 嗣 男	平成14(2002)年5月17日	清水 邦夫 (辞退)
角屋 睦	相賀 一郎	白滝 山二
木谷 収	遠藤 織太郎	長 智男 (辞退)
久保 七郎	緒形 博之	藤田 則之
古在 豊樹	菊岡 武男 (辞退)	山本 光男
佐野 文彦	久保 祐雄	
白井 清恒	澤田 敏男	平成16年度 (45名)
白石 英彦	高倉 直	平成17(2005)年5月13日
須藤 清次	藤川 武信 (辞退)	矢吹 萬壽
世良田 和寛	古谷 将 (辞退)	有馬 博
田渕 俊雄	松田 良一	高辻 正基
茶谷 仁	山本 茂	獅山 慈孝
中川 昭一郎		蔵田 憲次
中村 良太	平成14年度 (11名)	松井 健
橋本 康	平成15(2003)年5月16日	宮山 平八郎
前川 孝昭	上森 千秋	坂上 務
真木 太一	岩崎 和己	羽生 寿郎
安富 六郎	岸上 定男	三原 義秋
和田 完司	田中 宏平	藍 房和
	田中 弥寿男	田中 孝
平成12年度 (11名)	長野 敏英	前田 耕一 (辞退)
平成13(2001)年5月18日	中山 敬一	増田 正三
近藤 次郎	新田 慶治	三箇山 正雄
塩谷 哲夫	細川 明	山下 律也
庄司 英信	山澤 新吾	石光 研二
杉 二郎	米村 純一	小出 進
鈴木 義則		長崎 明
中村 武夫	平成15年度 (11名)	市村 一男
行方 文吾	平成16(2004)年5月14日	村瀬 治比古
野口 正三 (辞退)	不破 敬一郎	関谷 光博
林 弘宣	高井 宗宏	中原 通夫
八幡 敏雄	町田 武美	穴瀬 真
福田 仁志	渡部 一郎	松下 玄

徳永光一
河野洋
渡辺潔
石川明
田中礼次郎
篠邊三郎
河原田禮次郎
中村充
井上自然
佐藤晃三(辞退)
難波直彦(辞退)
岩田進午
野村安治
土崎哲男
岸本良次郎
鈴木光剛
湯川清光
中川稔
浅原辰夫
中島哲生

平成17年度(50名)
平成18(2006)年5月12日

堀部和雄
大島泰郎
大矢晴彦
須藤隆一
高桑栄松
都留信也
筑紫二郎
内嶋善兵衛
内島立郎
小元敬男
吉野正敏
小中俊雄
坂井純
並河清敏
村田敏博
森嶋博
立花一雄

海老澤 勲
相原良安
内海修一
今尾昭夫
長堀金造
梅田安治
戸原義男
村上康蔵
細山田健三
酒井信一
近森邦英
浅井喜代治
須藤良太郎
四方田 穆
内藤克美
吉田昭治
南 信弘
丸山利輔
鈴木敬
佐藤晃一
大根義男
仲野良紀
岡本雅美
谷山重孝
翁長謙良
江崎 要
黒田正治
長谷川高士
北村貞太郎
川尻裕一郎
富田正彦
豊田 勝
坂井直樹

平成18年度(19名)
平成19(2007)年5月11日
松岡孝尚
橋口公一
今井 勝
上村賢治

山崎 稔
長島守正
速水昭彦
多田 敦(辞退)
矢橋 晨吾
藤井弘章
高山昌照
笹野伸治
松田 豊
澁谷勤治郎
河野 広
中野政詩
飯本光雄
永田雅輝
岸田 義典

平成19年度(5名)
平成20(2008)年5月9日

堀口郁夫
谷 信輝
西山喜雄
上野久儀
原 道宏

平成20年度(12名)(予定)
平成21(2009)年5月22日

堀尾尚志
森泉昭治
岸田恭允
泊 功
瀬尾康久
笹尾 彰
市川友彦
伊藤和彦
佐藤洋平
山本 敏
仁科弘重
矢澤 進

(2) 日本農業工学会功績賞受賞者

日本農業工学会創立20周年記念功績賞受賞者

平成15年度(3名)

平成16(2004)年5月14日

木谷 収

橋本 康

中村 良太

日本農業工学会創立25周年記念功績賞受賞者

平成20年度(1名)(予定)

平成21(2009)年5月22日

前川 孝昭

(3) 日本農業工学会感謝状受領者

日本農業工学会創立25周年記念感謝状受領者

平成20年度(2名)(予定)

平成21(2009)年5月22日

馬目 雄一

菊辻 猛

13. 国際農業工学会 (CIGR) について

真木 太一・前川 孝昭

CIGR (International Commission of Agricultural and Biosystems Engineering :
Commission Internationale du Genie Rural)

1. 沿革と概要

CIGR は 1930 (昭和 5) 年 8 月にベルギーのレージュで同国の Prof. G. Bouckaert 教授を初代会長として創立された非政府、非営利の国際学術団体である。当初はヨーロッパ中心の学会であったが、その後アメリカ、アジア、さらにはアフリカ等の途上国も加入し、農業工学の全分野にわたる国際活動を続けている。CIGR は農業工学の前分野を包括する唯一の世界的学術団体として、第二次対戦の一時期を除いて、これまで活発な活動を展開してきた。活動の中心は会員である各国学会の力を組織化して、農業工学の学術的発展を図ることであるが、同時に国際食糧農業機構 (FAO) やユネスコと協力して、農業工学技術の移転など技術水準の向上にも大きな貢献を果たしてきている。

日本は第二次対戦後、農業工学会が連合して日本農業工学会を作り、CIGR に加盟し、一時断の時期もあったが、活動を続けてきた。1993 年に東京で総会を開催して以来、比重が増し、1995 年には日本学術会議が国会員として加盟することになり、CIGR 活動に対する日本の貢献が益々期待され、2000 年にはアジアで初めての世界大会が日本で開催されることになり、その結果成功裏に終了させることができ、日本の農業工学の地位を高めたと評価されている。

2. 目的

CIGR の目的は農業工学および関連する科学を通じて農業生産および資源の保全を合理化し、人類の要望と環境の改善に資することである。CIGR はその定款の中に、次のような目標を掲げている。

- ・ 農業・農村の発展のための学術の振興の推進
- ・ 若い農業工学技術者の教育、研修の推進
- ・ 情報の収集と伝達
- ・ 農業工学技術の移転と適用の推進
- ・ 農業に従事する人達の福祉向上に貢献
- ・ 農業工学分野を代表する国際組織活動

3. 組織

1) 運営組織

(1) 総会：原則的に隔年開催である。役員を選出、規則改正、活動計画、予算案・決算等、重要事項の決定を行う。各国会員から 1 名、各地域会員から 1 名の代表と執行役員 (4 名) および技術部会議長 (7 名) から構成される。

(2) 幹部会 (理事会)：少なくとも年 1 回開催し、運営に関することを決定する。執行役員 (会長、前会長、次期会長、事務局長) および各参加団体より推薦され、世界大会の総会で

決定された理事より構成される。

(3) 執行役員 (2008年12月現在) (2009年1月変更)

会長 : Prof. Irenilza Naas (ブラジル)

前会長 : Prof. Luis S. Pereira (ポルトガル)

次期会長 : Prof. Soren Pedersen (デンマーク)

次々期会長 : Prof. Fedro Zazueta (米国)

事務局長 : Prof. Eme. Takaaki Maekawa (前川孝昭) (日本)

(4) 事務局所在地 : Prof. Eme. Takaaki Maekawa, University of Tsukuba, Tennodai 1-1-1, Tsukuba, Ibaraki, 305-8572 Japan E-mail: biopro@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

(5) 学術活動組織 :

CIGRは農業工学に関する様々な科学技術分野に対応して、次の7技術部会を設けて活動を行っている。技術部会の運営は、それぞれの技術部会議長会議で決定する。各技術部会は議長、副議長、連絡責任者および10名以内の委員よりなる。7技術部会議長は定期的に幹部会との連絡会議を持っている。現在、日本からは第4技術部会議長、その他、に6名の技術部会委員を出している。

第1技術部会 : 農地・水の管理に関する科学技術

第2技術部会 : 生物生産施設・環境に関する科学技術

第3技術部会 : 生物生産機械に関する科学技術

第4技術部会 : 農業電化とエネルギー・資源に関する科学技術

第5技術部会 : 農作業管理・人間工学に関する科学技術

第6技術部会 : 農産物・食品加工に関する科学技術

第7技術部会 : 情報システムに関する科学技術

また、CIGRはWG(ワーキンググループ(作業部会))を置き、各技術部会で絞り込む課題や技術部会にまたがる学際的課題および技術革新の中で新規に登場してきた課題の対応に当たっている。

2) 構成会員

国として農業工学関連の学会を代表する学会が国会員としてCIGRに参加を申請し審議の上、会員になることができる。また同様に国を超えて結成されている地域学会も地域会員として参加することができる。また、どちらにも該当しない場合は申請した段階で審議され協力会員として参加を認められる場合がある。基本的には個人として、直接CIGRの会員になることはできないが、国会員または地域会員および協力会員の各団体に所属し、国際会員を希望する場合、個人としてCIGR会員の資格を持つことができる。

会員団体数 : 30 (国会員(16)、地域会員(7)、協力会員(7))、会員団体関係国 : 99カ国

会員団体国・地域 : オーストラリア、オーストリア、ブラジル、ブルキナファソ (中北西アフリカ連合、14)、ブルガリア (南東ヨーロッパ連合、16)、カナダ、中国、コスタリカ (ラテンアメリカ連合、13)、チェコ、エジプト、フランス、ガーナ、ドイツ (ヨーロッパ連合、20)、イラン、イスラエル、イタリア、日本、ケニア (南東アフリカ連合、11)、韓国、モロッコ、ポーランド、ロシア、スロバキア、スーダン、南ア連邦、タイ、トルコ、中華 (AOC)、アラブ首長国連邦、アメリカ合衆国

4. 主な事業及び活動

(1) 世界大会:4年ごとに農業工学部門の研究発表を中心とした世界会議(World Congress)が開催される。

国際会議:世界大会開催の中間の年に4年ごとに国際会議(International Conference)が開催される。

(2) 研究会等:前記7技術部会は各専門分野の国際研究会等を世界大会の合間にそれぞれ少なくとも1、2回ずつ開催している。またCIGRの各国会員学会は、CIGRと共催の形でしばしば国際シンポジウム等を行う。これらの研究発表の成果は、その都度プロシーディングとして刊行している。

(3) 国際電子ネットワーク:CIGRは各国・各地域会員学会を結ぶためウェブサイト設置し、電子情報ネットワークを構築して、農業工学関連技術情報の伝達の拡大、迅速化を図っている。

(4) 農業工学ハンドブック:CIGRは農業工学関連科学技術の全域にわたる総合的なハンドブックを出版している。販売はASABEが担当し、ASABEのホームページの出版物ページで購入できる。

(5) 電子ジャーナル:“CIGR Ejournal”(<http://www.cigrjournal.org>)で、研究論文の投稿を受け付け、学会誌を編集してウェブサイト上で発行している。

5. 財政

各国等から納入される年会費および世界大会や国際シンポジムの上納金を主要な財源とする。1995年の予算は約3万US\$であった。ドイツにあった前事務局はドイツ連邦政府、ボン大学等の支援によって維持されていたが、2006年に事務局が日本に移動してから、日本では事務局への補助は、農業機械関係等の民間からの補助はあるが、公的機関からの補助は行われていない。

6. 分担金

6,900 US\$ /年 (1995~2008年): 日本学術会議負担

7. 日本学術会議との関係

日本学術会議は度々CIGR総会に代表を派遣してきた。1991年のパリでの総会に橋本 康が、1992年のブリュッセルの総会及び1996年のマドリットの総会に木谷 収、1998年のラバトの総会に瀬尾康久が代表派遣された。

最近では、2002年のアメリカ・シカゴでの総会に木谷 収、2004年北京での総会には木谷収、2006年のドイツ・ボンでの総会に木谷 収・前川孝昭・真木太一、2008年のブラジル・イグアスの総会に真木太一・前川孝昭・佐藤洋平が代表派遣された。

なお、1995年に、日本学術会議が国会員として加盟することとなり、農業工学関連研連が協議し、CIGR小委員会を組織して諸活動の連絡調整に当たってきたが、第17期に農業工学3研連が協力し、CIGR専門委員会を組織して対応した。

2007-2008のCIGRの日本人役員等は以下のとおりである。

執行役員（事務局長）：前川孝昭（筑波大学名誉教授）
理事：佐藤洋平（農業環境技術研究所理事長）、岸田義典（新農林社）
第1部会委員：後藤 章（宇都宮大学農学部教授）
第1部会名誉議長：佐藤洋平（農業環境技術研究所理事長）
第2部会委員：川村周三（北海道大学大学院農学研究院准教授）
第3部会委員：野口 伸（北海道大学大学院農学研究院教授）
第4部会議長：梅田幹雄（京都大学大学院農学研究科教授）
第5部会委員：堀尾尚志（神戸大学農学部教授）
第6部会委員：豊田浄彦（神戸大学農学部教授）
第7部会副議長：村瀬治比古（大阪府立大学大学院農学生命科学研究科教授）
第7部会名誉議長：橋本 康（愛媛大学名誉教授）

2009-2010のCIGRの日本人役員等は以下のとおりである。

執行役員（事務局長）：前川孝昭（筑波大学名誉教授）
理事：佐藤洋平（農業環境技術研究所理事長）、岸田義典（新農林社）
監査：岸田義典（新農林社）
第1部会委員：後藤 章（宇都宮大学農学部教授）
第1部会名誉議長：佐藤洋平（農業環境技術研究所理事長）
第2部会委員：川村周三（北海道大学大学院農学研究院准教授）
第3部会委員：野口 伸（北海道大学大学院農学研究院教授）
第4部会議長：梅田幹雄（京都大学大学院農学研究科教授）
第5部会委員：堀尾尚志（神戸大学農学部教授）
第6部会委員：豊田浄彦（神戸大学農学部教授）
第7部会副議長：村瀬治比古（大阪府立大学大学院農学生命科学研究科教授）
第7部会名誉議長：橋本 康（愛媛大学名誉教授）
作業部会議長（ワーキンググループ議長）：大野 研（三重大学生物資源学部准教授）

8. 過去および最近の活動状況

日本学術会議第16期で農業土木研連にCIGR小委員会が設置されていたが、学術会議がCIGRに加盟したため、第17期において定員3名のCIGR専門委員会が設立された。この状況で、第18、19期と継続したが、第20期に至って大改革があり、第2部農学基礎委員会（主）・生産農学委員会に所属して、CIGR分科会が発足した。2006年10月当初3人で組織したのち委員19名、オブザーバー11名となった。また、21期では2008年10月当初は7名で組織し、今後、増強することとなっている。

(1)第20期CIGR分科会（第2部 生命科学 農学基礎委員会・生産農学委員会）

委員長：木谷 収（連携会員）
副委員長：真木太一（会員）
幹事：野口 伸（会員）
幹事：前川孝昭（連携会員）
幹事：村瀬治比古（連携会員）

委員（連携会員）：梅田幹雄、大下誠一、大政謙次、奥島里美、後藤英司、笹尾 彰、佐藤洋平、田中忠次、橋本 康、早川誠而、町田武美、三野 徹、宮崎 毅、横山伸也

オブザーバー：岩崎和己、川村周三、岸田義典、後藤 章、駒村正治、千賀裕太郎、豊田浄彦、西崎邦夫、花形将司、堀尾尚志、米川智司（日本農業工学会理事）

(2) 第 21 期 CIGR 分科会（農学委員会・食料科学委員会）

委員長：真木太一（会員）

副委員長：村瀬治比古（連携会員）

幹事：野口 伸（会員）

幹事：前川孝昭（連携会員）

委員（連携会員）：梅田幹雄、木村俊範、町田武美

9. 日本での会議等の開催実績及び開催予定

1993 年 5 月：CIGR 総会及びシンポジウムを東京都（東京大学山上会館）で開催

2000 年 11 月：CIGR 第 14 回世界大会を茨城県つくば市（筑波大学）で開催

2006 年 1 月：CIGR 事務局、ドイツより日本・筑波大学（つくば市）に移動

2006 年 3 月：CIGR 事務局の開所式典を茨城県つくば市（筑波大学）で開催

2010 年 1 月：CIGR 事務局、筑波大学（つくば市）より北海道大学（札幌市）に移動予定

2011 年 9 月：CIGR 国際シンポジウムを東京都（タワーホール船堀）で開催予定

1 4 . JAICABE - at a glance -

Yasushi HASHIMOTO and Taichi MAKI

JAICAE (The Japan Association of International Commission of Agricultural and Biosystems Engineering) - at a glance -

(1) About JAICAE

JAICAE, founded in 1984, is a federation of societies of agricultural engineers, each one representing the engineering and scientific societies concerned with its special area accredited by Science Council of Japan.

The purpose of the federation is to promote the science and technology of agricultural engineering in the broadest sense in all agricultural and food systems, whether, for example, engineering, physical, biological, social or economic, in both theory and application including the development.

JAICAE is also closely related to CIGR (International Commission of Agricultural Engineering). As CIGR is global organization, JAICAE may be noted as the Japanese branch of it.

Therefore JAICAE-activities are not only for the participating societies in domestic events but also for everyone in international events sponsored by CIGR, in agricultural engineering research, development and education.

Eleven societies are involved in promoting and developing the area of agricultural engineering by organizing joint technical symposium and so on.

(2) How JAICAE can be reached

Through your local society, it will become active in international events by CIGR.

To get any required address or additional information, please contact the JAICAE Secretariat, showing after.

(3) How JAICAE's technical symposium is organized

JAICAE organizes the joint technical symposium on the day for annual General Assembly of 10-participating societies. The technical symposium is performed by the Council-meeting which has a coordinating function and is responsible for planning technical meetings and promoting the respective sub-areas of agricultural engineering.

(4) What is JAICAE? What are its aims?

The primary objective of JAICAE is to serve all those concerned with the theory and application of agricultural engineering, where ever situated. To further this aim, it maintains working relationships with other organizations, national or international, especially with other non-governmental professional federations.

JAICAE provides a framework for collaboration between those working in agricultural engineering and promotes free exchange of ideas and experts within its professional fields.

JAICAE does not become involved in any kind of political activity, nor does it take a position in any such issue. JAICAE does not take part in any commercial activity with the explicit aim to acquire financial gain.

JAICAE pursues its purpose by organizing technical symposium, by coordinating agricultural engineering recently as to JABEE and by any other means consistent with its constitution and which will enhance the interchange and circulation of information on agricultural engineering activities.

Especially, JAICAE organized “The XIV Memorial CIGR World Congress 2000 sponsored by Science Council of Japan as well as by CIGR”, and is organizing “CIGR International Symposium on Sustainable Bio production – Water, Energy, and Food will be sponsored by Science Council of Japan as well as by CIGR”. Information on the activities appears or will be appeared near future on the JAICAE homepage (HP): <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jaicae/>, and in the CIGR Newsletter.

JAICAE closely cooperates with such other organizations as SCJ (Science Council of Japan), AJASS (Association of Japanese Agricultural Scientific Societies) and so on.

(5) History of JAICAE

In 1984, JAICAE was re-constructed by seven societies relating to agricultural engineering, namely Japanese Society of Irrigation, Drainage and Reclamation Engineering (JSIDRE), Japanese Society of Agricultural Machinery (JSAM), The Society of Agricultural Meteorology of Japan (SAMJ), Japan Association of Agricultural Electrification (JAAE), Japanese Society of Environment Control in Biology (JSECB), Japanese Society of Farm Work Research (JSFWR), Society of Agricultural Structures of Japan (SASJ). Prof. K. Shirai was elected as the first president of JAICAE.

In 1990, Association of Rural Planning (ARP) was accepted to join JAICAE.

In 1996, Japanese Society of Closed Environmental Life Support Systems (CELSS) and Japanese Society of High Technology in Agriculture (SHITA) were invited to join JAICAE for the preparation of CIGR World Congress 2000 in Japan.

In 1997, Japanese Society of Agricultural Informatics (JSAI) was also accepted to join JAICAE.

The name of Japanese Society of Closed Environmental Life Support Systems (CELSS) was changed to the Association of Eco-Engineering (SEE) in Sep. 2001.

Two societies of Japanese Society of Environment Control in Biology (JSECB) and Japanese Society of High Technology in Agriculture (SHITA) united to Japanese Society of Agricultural, Biological and Environmental Engineers and Scientists (JASBEES) on Jan. 1, 2007.

The name of Japanese Society of Irrigation, Drainage and Reclamation Engineering

(JSIDRE) was changed to Japanese Society of Irrigation, Drainage and Rural Engineering (JSIDRE) on June 29, 2007.

Now (in 2009), JAICAE is the federation of ten societies relating to agricultural engineering in Japan, its population becomes over 17,250 engineers.

JAICAE has ten Presidents since 1984.

I : *Prof. Kiyotsune Shirai (JSIDRE): 1984-1986*

II : *Prof. Seiji Sudo (JSIDRE): 1986-1988*

III : *Prof. Mutsumu Kadoya (JSIDRE): 1988-1990*

IV : *Prof. Syoichiro Nakagawa (JSIDRE): 1990-1992*

V : *Prof. Fumihiko Sano (JSAM): 1992-1994*

VI : *Prof. Toshio Tabuchi (JSIDRE): 1994-1997*

VII : *Prof. Yasushi Hashimoto (SHITA & JSAI): 1997-2000*

VIII : *Prof. Osamu Kitani (JSAM): 2000-2003*

IX : *Prof. Masashi Nakano (JSIDRE): 2003-2006*

X : *Prof. Taichi Maki (SAMJ): 2006-2009*

The 10th President Prof. Taichi Maki (SAMJ) was elected by the General Assembly in 2006 for the 2006-2009 term of office.

The JAICAE Secretariat has a rotation home. By invitation of the JASBEES, it has been situated formally at Kyushu University (Prof. Jiro Chikushi) in the office of JASBEES, but actually at Osaka Prefecture University (Prof. Haruhiko Murase and Dr. Hirokazu Fukuda).

JAICAE Secretariat:

Prof. Haruhiko Murase, Osaka Prefecture University,

Gakuen 1-1, Sakai, Osaka 599-8531, Japan

TEL: 81+72-254-9429 FAX: 81+72-254-9918

(6) JAICAE Organization

Officers and Officials

Honorary Advisors

Prof. Emeritus Dr. Fumihiko Sano

Prof. Emeritus Dr. Syoichiro Nakagawa

Prof. Emeritus Dr. Kiyotsune Shirai

Former Prof. of Univ. of Tokyo Dr. Toshio Tabuchi

Prof. Emeritus Dr. Yasushi Hashimoto

Council Members: 2006-2009

(Several members were changed in May, 2008)

President: Prof. Taichi Maki: maki1944@agr.u-ryukyu.ac.jp

Vice-president: Prof. Haruhiko Murase: hmurase@bioinfo.osakafu-u.ac.jp

(Secretary General: Prof. Haruhiko Murase (2008-2009))

Vice-president: Prof. Masaharu Komamura: koma@nodai.ac.jp

Secretary General: Dr. Masami Iwasaki (2006-2008)

Director: Prof. Takaaki Maekawa: biopro@sakura.cc.tsukuba.ac.jp
Prof. Kenji Omasa: aomasa@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp
Prof. Yasushi Hashimoto: yh840@peach.ocn.ne.jp (2006, 2007-2009)
Assoc. Prof. Satoshi Yonekawa: yonekawa@fm.a.u-tokyo.ac.jp
Prof. Akira Sasao: sasao@cc.tuat.ac.jp
Prof. Takemi Machida: machidus@yahoo.co.jp
Prof. Noboru Noguchi: noguchi@bpe.agr.hokudai.ac.jp (2008-2009)

Treasurer: Dr. Shoji Hanagata (2006-2008)
Dr. Osamu Matsuoka: matsuoka.osamu@tepcoco.jp (2008-2009)
Prof. Yutaro Senga: senga@cc.tuat.ac.jp

Secretary: Mr. Takeshi Kikutsuji (2006-2008)
Dr. Hirokazu Fukuda: fukuda@bioinfo.osakafu-u.ac.jp (2008-2009)

(7) Fellow

The first Fellow was awarded to 19 persons in 2000, shown as follows:

Kiyotsune Shirai, Seiji Sudo, Mutsumu Kadoya, Syoichiro Nakagawa, Fumihiko Sano, Toshio Tabuchi, Hitosshi Chaya, Sichiro Kubo, Hidehiko Shiraishi, Kanji Wada, Tuguo Okamoto, Osamu Kitani, Toyoki Kozai, Kazuhiro Serata, Ryota Nakamura, Yasushi Hashimoto, Takaaki Maekawa, Taichi Maki, Rokuro Yasutomi

The total numbers of the Fellow will be 194 persons in 2009.

おわりに

日本農業工学会長 真木 太一（第10代会長）

日本農業工学会創立25周年については、あまり意識がなく、たまたま、昨年2008年に日本農業工学会は、長年大変お世話になった農業農村工学会の農業土木会館から、いわゆる独立することになり、日本生物環境工学会に事務局を全面的にお願いしています。そのことで、本学会の創立年、歴史を見ていて気づく結果となり、また「来年は25周年」、シンポジウムは？式典は？と言うことになりました。幸いにも開催会場は申し分ない東京大学弥生会館（一条ホール）であり、また記念シンポジウムの課題も適切で、開催前日5月21日には同会場で農業情報学会が開催されるので、引き続き記念シンポジウムの開催は時宜を得たものと思われま。一方、記念式典・祝賀会は、ささやかですが、同会場で開催すれば形が整うと思われ、気を強くした次第です。

さて、本冊子の出版については、25周年を記念する出版物を考え、昨年10月より対応しましたが、資料を整理するとなりますと結構大変で、忙しさに紛れて遅れ気味となりました。幸い20周年記念として「日本農業工学会（JAICAE）－その組織と活動－」が橋本康元会長のご尽力で刊行されていまして、大変参考になりました。

本格的に、執筆を初めて、ある程度軌道に乗った時点で、その他の研究・事務等々の任務・雑用で、手が付かなくなりましたが、2009年になって、再び取りかかりました。同様のスタイルで、その後の資料を追加して、刊行することができました。本書を出版するに当たり、多くの方々、特に橋本先生にお世話になりました。心より御礼申し上げます。

1月28日に防風林の調査がてら沖縄中部域の有名な本部・八重岳の桜を見に行きましたが、さすが見事でした。すでにその時にも一部の桜は盛りを過ぎていましたが、「はじめに」を書き始めたのは2月1日でしたが、那覇市・西原町付近でも一部の桜は同様でした。「おわりに」を書き始めた2月28日には、那覇市－西原町の琉球大への道路で、最後に咲いていた見事な桜も終わり、寂しい限りでした。一方、やはり勤務の道中で小高い丘の南向きの桜は毎年真っ先に咲きますが、すでに新緑から夏葉の葉桜となっています。期間の長さには驚きを感じます。実は昨年年末頃にはそれらの桜はちらほら咲き始めていた訳ですが、去年は台風もなく、強制的な風害による落葉も少なかったのに、狂い咲きかと思いましたが、気候が穏やかで一時、低温があったことで、それ以降の高温が開花促進に作用して、いわゆる生物気象、農業気象の典型的な桜開の予測が、ずばり成り立つ結果となったと判断されます。

しかし、本土のソメイヨシノ桜は沖縄にはないので、少々異なり、標準木を決めていても、さぞかし予測が難しいでしょう。2008年は黄砂シンポジウムを3月5日に琉球大学で開催しましたが、その時にはまだ咲いていない桜もあったのにと、年次の差異を感じる次第です。その原因は低温でしたが、12月中旬より1ヶ月して僅かに数時間太陽が出たとの新聞記事があり、その後2月中旬に、また1ヶ月振りの太陽が出たとの記事は印象的でした。2007年秋季より2007～2008年の寒候期は体調不良で、大変つらい思いを実感したことを思い出していますが、今年の冬季の暖かさは異常でしょう。1週間近く連続して夏日（最高気温が25℃以上）が続くなど、信じられないような異常気象があり、また全国的にも2月での最高気温の記録更新を相当多くの地点であったことを述べておきます。なお、今年は大変不順で冷夏が懸念されますが、関係者の方々にはご注意いただきたいことを述べて、おわりとしたいと思います。

さて、3月6日にCIGR国際シンポジウム2011の日本学術会議との共同開催が可能との情報が入りました。今後一層、国際シンポジウムの開催に向けて準備していきたいと思えます。

最後に、5月22日の総会で会長を交代しますが、新会長のもと、今後とも日本農業工学会へのご協力を切にお願い致します。ありがとうございました。

（琉球大学農学部教授、日本学術会議会員、九州大学名誉教授）

発行日 平成 21 (2009) 年 3 月 20 日

発行者 日本農業工学会

会長 真木 太一

発行所 日本農業工学会

〒599-8531 大阪府堺市中区学園町 1 - 1

大阪府立大学大学院農学生命科学研究科 村瀬治比古

Tel : 0722-54-9429, Fax : 0722-54-9918

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 福田弘和

Tel : 072-254-9430(内線 2412), Fax : 0722-54-9918

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6 - 1 0 - 1

九州大学生物環境調節センター内

日本生物環境工学会事務所

連絡先 〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原 1 番地

琉球大学農学部 真木 太一

Tel・Fax : 098-895-8784

日本農業工学会・J A I C A B E | 組織と活動 |

日本農業工学会

2009年3月